



イエス・キリスト、
この世の救い主

わたしを信じる者は永遠の命を持っている
ヨハネの福音書第6章47節

最も小さい兄弟たちの一人に
マタイによる福音書 25:40

序文

本書は、すべての方々へ向けたものです。ですが、クリスチャンとなられながらも、日々をため息と共に過ごし、まだ心の平安を得ていない多くの方に、特に読んでいただければと思います。さて、新約聖書を読みますと、一つ明らかなことがあります。それは、イエス様の御心は、常に弱き者、虐げられた者へと向けられ、また、イエス様は迷える者のためにいらっしゃったということです。そのイエス様の御心は、今日も変わることなく、道に迷った羊へと向けられています。イエス様はほかの何よりも、迷える羊を大切にされているのです。

この本を書くにあたって、わたしの唯一の思いは、イエス様ご自身の体のいやしという希望にあります。そして読者の皆さんが救い主イエス・キリストと出会い、そしてまた、より深く知ることを心から願っています。ヨハネによる福音書第6章47節に、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と書かれています。そうです、主を信じる人はだれでも、永遠の命を持っているのです！この永遠の命は、今日、この日のためにあります。イエス様は、「持つであろう」ではなく、「持っている」と言われました。この言葉から分かるように、イエス様を信じる人は、永遠の命を「持っている」のです！つまり、永遠の命とは、天の御国で与えられ、そこでだけ謳歌するものではありません。今日の、この日のためにあるのです。人生は良いものです。そして今日が、あなたの救いの日、自由となる日なのです。生命の源であるイエス様は、あなたのために来てくださいました。あなたがどこにしようとも。

目次

第1章：イエス・キリスト、この世の救い主	1
第2章：イエス・キリストにある新しい命	33
第3章：キリストと共に生きて得る最初の実	49
第4章：愛によって働くイエス様への信仰	69
第5章：イエス様の栄光を見る	83

第1章:イエス・キリスト、この世の救い主

この世に生れ落ちた人間に付きまとう最大の問題、それは魂の救いです。老若男女問わず、全人類に差し迫ったニーズだといえます。人生とは何なのか、だれがわたしを造ったのか、なぜわたしはここにいるのか、なぜ死ななければならないのか、なぜこの世に苦しみがあるのか、どうすれば罪の意識から逃れられるのか、平和や幸せを続かせるにはどうすればいいのか、良い生活を送るために必要な力や知恵はどうすれば得られるのか…。国や個人の経歴には関係なく、このような多くの悩みは尽きることがありません。しかし、よき知らせがあります。人間につきまとう、さまざまな苦悩への答えがあるのです。イエス・キリスト、この世の救世主、この方こそが、その答えです。

第一章は、この本全体を通して最も重要な章であるということから、書き始めたいと思います。なぜなら、本章では、聖書で一番大切な約束についてご説明するからです。ヨハネの福音書第6章47節に、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と書かれています。この単純明解な約束は、乾き、干上がった大地を潤す水のようなものです。そして、小さな子どもでさえ理解できるほど明解です。また、罪人の王でさえも、希望や逃げ場を見つけられるほど、寛容な約束なのです。イエス様は救い主であり、そこに救いの言葉があります。つまり、人間を救う御言葉があるのです。本章では、救いの約束が書かれた、この一節を解き明かしていきたいと思います。もし、救い主が必要だとお

思いでしたら、この章に書かれていることを、ぜひ受け入れてください。もしくは、ご自分の罪に疲れ、新しい人生が必要だと思いでしたら、同じく、受け入れて欲しいと思います。わたしはイエス様を信じています。イエス様こそが、この世の救い主であることを知っています。そしてほかにも一つ知っています。それは、今の、あるがままのあなたをも、お救いになりたいとイエス様が切望されているということです。

一つお尋ねします。なぜ、イエス様はこの世にいらっしゃたのでしょうか？使徒パウロはこう答えました。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は、確実で、そのまま受け入れるに足るものである。」（テモテへの第一の手紙第1章15節）事実、イエスという御名には、「救世主」、「神は救い」という意味があります。マタイによる福音書第1章21節には、「彼女は男の子を産むだろう。あなたはその名をイエスと呼ぶことになる。この者こそ、自分の民をその罪から救うからだ」とあり、また同様に、「キリスト」とはイスラエルを救った「油を注がれた者」を意味しています。この御名に含まれる意味は非常に重要です。なぜなら、わたしたちは救いを受けるため、イエス様、ただお一人だけが救い主だと理解しなければならないからです。イエス様は主であり、指導者であり、また教師でもあります。救いを受けるには、イエス様をただ救い主として見なければなりません。その点から、ルカによる福音書第2章11節は大変重要な一節となります。そこには「すなわち、今日、ダビデの町で、あなた方に救い主、主なるキリストが生まれたのだ」と書かれています。この節で

は、イエス様が主であるだけでなく、イエス様ご自身が救い主になられることを決められたと教えています。主が、救い主になられました。つまり、わたしたちが救いを得るために主であるイエス様を従う道を選ぶのではなく、正確に言えば、イエス様はすでに主であられました。それでも尚、イエス様は救い主になると決められたのです。イエス様は主人でありながら、しもべになりました。わたしたちはイエス様だけを、救い主として理解しなければなりません。イエス様は、この方こそが救い主だと、わたしたちが理解できるように、この世に来てくださったのです。この世へ来ること、そして救い主となられることは、イエス様、ご自身の決断でした。では、だれを救うためにいらっしゃったのでしょうか？「罪人を救うためにこの世にきて下さった」（テモテへの第一の手紙第1章15節）とあります。罪人とは、イエス様を「主」と呼べない人々を指しています。実際、聖書では救われた人々のことを、罪によって死んでいた者、神の敵であった者と教えています（エペソ人への手紙第2章1節、ローマ人への手紙第5章10節）。これが正に、イエス様を救い主であると理解しなければならない理由です。悔い改めを知らず、よりよい行動を取りたいと願えない人々を救うべく、この世に来られたのです。自分の十字架を背負い、イエス様の後について行くことのできない人々を救うために。罪人は非力で、主のために何の良き働きもなすことができません。ですから、イエス様が救いのために来られたという知らせは、本当にすばらしいものなのです。あなたは疲れ、倦怠感に満ち、また病気などではありませんか？自由への道しるべがなく、浮き沈みの中を堂々巡りしていませんか？

罪や過ちからの重荷を背負っていませんか？死や罪の定めを恐れ
ていませんか？もし、ここに当てはまることがあれば、あなたには
今、救い主が必要です。救い主を必要としないという方は、救われ
ません。イエス様は、人生を変える必要のある人、またそう望む人
のために来られたものではありません。そうではなく、人生を一変と
新しいものとする必要のある人のために来られました。

「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠
の命を持っている。」（ヨハネによる福音書第 6 章 47 節）この約
束は恐らく、聖書で最も簡潔な約束だと思われます。わたしたちに
でも理解できるよう、イエス様が簡潔な表現をしてくださったので
す。イエス様ご自身、神の王国は幼子のものであり、わたしたちも
幼子のように受け入れなければならないと証言しています（ルカに
よる福音書第 18 章 16 節から 17 節）。このように、わたしたちは
永遠の命への約束を幼子のように受け入れ、そして主は、約束され
たことを必ず成就されると、ただ信じるしかありません（ローマ人
への手紙第 4 章 21 節）。幼子のように、信仰のみによって、この
約束の一節を受け入れたとき、わたしたちは神の救いを知ること
になります。そして、罪からの完全な解放、力、愛、神への敬意、川
のように流れる平安を得るでしょう。さて、皆さんは、「では、ど
うすればいいのだろうか？」、「この一節から、どうしてそのような
解釈ができるのだろうか？」と疑問を持たれたかも知れません。出る
限り分かりやすくご説明しますので、もうしばらくお付き合いく
ださい。先でも触れたように、この第一章全体を通して、ヨハネに
よる福音書第 6 章 47 節で語られているイエス・キリストの救いを

ご説明しますので、より深くご理解いただけるかと思えます。さて、救いとは何か、いつ受け入れることができるのか、執行人はだれか、どうすれば受け入れられるのか、といった4つの事柄がこの一節から分かります。手短に、これら4つの点について見ていくと同時に、この救いの約束を受け入れることの重要性を要約したいと思います。この考察により、約束の偉大さがより理解しやくすなることでしょう。では初めに、この節が何を語っているのかを見ていきます。そして、そのあと、約束を受け入れることの偉大さと、それが人生に与える影響へと理解を進めます。

まず、救いについて、この箇所では何と書かれているかを見てみましょう。さて、救いとは何でしょうか？「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。救いとは、永遠の命です。全人類は死にます。全人類は、恐れと罪の意識をもっています。死とは人が打ち勝つことのできない敵であり、また、死のとげは罪です。(コリント人への第一の手紙第15章56節) 人類は死や罪から救われなければなりません。だからこそ、永遠の命が救いなのです。さて、ここで永遠の命からもたらされる栄光について説明するつもりではないのですが、その揺るぎない事実を2つ、ご紹介させてください。まずは、永遠の命はよきものであるということ。人生は良いものです。これはだれも否定できない事実だと思います。苦しみや暗闇の中を生きている人に限り、この事実を否定しようとはしますが、それは本当の人生がどういったものなのかをご存知ないからです。苦しみや暗闇での歩み、それは本当の人生ではありません。次に、永遠の命を持っている人は、満ちたりてい

るという事実です。人生は良いものですが、永遠の命は無限です。暗闇や死もなく、何かを失う恐れもありません。なぜなら、それは永遠だからです。無限に良いものを持っている人は、もう何かを手に入れようと思えばいい必要はないのです。

イエス様はこの世に来られました。そして、わたしたちの罪とわたしたちの命のために、十字架の上で亡くなられました。イエス様の十字架での死によって、わたしたちは永遠の命を受ける権利を得ました。この永遠の命の威力は、イエス様の復活からも見ることができます。この方こそが命です。そしてそれだけでなく、使徒ヨハネは、最初の手紙でイエス・キリストご自身が永遠の命であること、そしてその永遠の命は、イエス様の内にあるのだと伝えています（ヨハネの第一の手紙第5章11節と20節）。すなわち、永遠の命とはイエス様ご自身であり、イエス様とはそのようなお方なのです。永遠の命は真実です。朽ちることもなく、非の打ち所ありません。祝福に満ち、純潔で、よきお方です。ほかのどのような褒め言葉でも当てはまるほど、素晴らしいお方なのです。世界中の全言語をもってしても、イエス・キリストご自身である永遠の命の、大きさ、長さ、奥行き、高さなど、到底表現することはできないのです。

では、次に、この救いをいつ受けられるのかという点について見ていきたいと思います。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」ご覧のように、「持っている」という現在形が使われています。なんと輝かしいことでしょう。「わたしを信じる者は永遠の命を『持つだろう』」と言われてただけでも、十分すぎるほどの栄光です。ですが、わたしたちの喜

び、安堵のため、主は、「わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と仰ったのです。今、この瞬間が受け入れるとき、つまり、救いの日なのです（コリント人への第二の手紙第6章2節）。アーメン。わたしたちの救いの日は、今日です。救いの栄光は天の御国に入ってから楽しむものである、という考えは間違いです。完全なる永遠の命は、今日のこの日のためにあります。そのことを悟り、この真実を受け入れましょう。この世にあって、救いによる完全な自由を見つけるために。天の御国での体がこの地上での体に勝るように、御国での栄光はこの地上での栄光に勝るものでしょう。しかし、今、この地上で受けられる救いの栄光も、その威力、偉大さ共に、永遠なのです。

続けて、その救いをだれが執行するのかについてみてみましょう。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。ここで書かれている「わたし」とはだれでしょうか？イエス・キリストです。イエス・キリストが提唱し、執行し、わたしたちに救いを与えてくださります。「『神』を信じる者は永遠の命を持っている」や「『どこそこ教会での教義』を信じる者は永遠の命を持っている」とは言われていません。イエス様は明確に「わたしを」と断言しています。わたしたちはだれに目を向ければいいのでしょうか？イエス様以外の、だれか、またはほかの何かへと向けられていないのでしょうか？もしそのようなことがあれば、それが弱さが充満している理由、また、毎日毎日、止むことなく多くの罪の告白が続けられる理由なのでしょう。わたしたちの目が、父、聖霊、使徒、そのほかのものに熱心に向けられているのなら、救い

による完全な自由がないのも、うなづけます。また、わたしたちの聖書の学びが神学的な仕組みや律法、神の恩恵や恵み、摂理、契約、歴史などのものばかり扱ったとしたら、それがこの世に、鈍感で弱く、病気を患う人々が多い理由だと言えるでしょう。わたしたちは、ほかの何者でもなく、主イエス・キリスト、ただこの方だけに目を向け、心を注ぎましょう。イエス様はわたしたちのすべてなのですから。ハレルヤ！

最後に、4点目である、どうすれば救いを受けられるのかについて見てみましょう。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」から分かるように、「信じる」ことにより救われます。この輝かしい知らせにより、すべての人々が救いへと招かれているのです。あなたは、罪の重荷を背負い、また悔い改めることもなしに、非力に甘んじていませんか？限界で、望みすら持つことのない状態ではありませんか？とりわけ、このイエス・キリストの救いは、そのような状態にある方々のためにあります。それだけでなく、イエス様を救い主であると理解し、信仰を持ったその瞬間、わたしたちは救いへと導かれるのです。繰り返す必要はないとは思いますが、以下のことに留意してください。イエス様は「わたしに『従う者』は永遠の命を持っている」とも、「わたしを『おのれの主とする者』は永遠の命を持っている」とも、また「『祈りをささげ、待ち、求め、また約束する者』は永遠の命を持っている」ともおっしゃいませんでした。とても単純な言葉、「信じる」という言葉を使って語られました。イエス様は、子供でさえ理解できる言葉を用い、それ故、わたしたちは「信じる」という言

葉の裏に、暗く隠された意味があるのではないかと探る必要がなくなりました。ヨハネによる福音書第6章47節と同じような聖句があります。そこには「しかし、彼を受け入れたすべての者たち、その名を信じた者たちに、彼は神の子供となる権利を与えた」（ヨハネによる福音書第1節12章）と書かれています。この節にも「その名を信じた」とあります。このように、信じる以外何もないのです。わたしたちは、「信じる」という言葉の意味を、正にそのまま、最も自然で基本的な考えとして理解しなければなりません。そしてこの節を、小さな幼子のように受け止めなければならないのです。「信じる」という言葉をお使いになった神に感謝しましょう。だれしものが、今、ここで本当の救いの豊かさへと身をゆだねることができるのです。

この永遠の命の約束が、実際の生活へどのように適用されるのを見る前に、神からの約束を受け入れる、そのすばらしさを簡単に記したいと思います。パウロはヘブライ人への手紙の中で、神の約束は不変であると伝えています。つまり、取り消されることはありません（ヘブライ人への手紙第6章16節から18節）。約束を受けた者はその全生涯において、約束が果たされるという保証の上に、安息を得るという意味です。今一度、約束の言葉を見てみましょう。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」イエス様は「本当にはっきりと」という言葉で、約束を修飾されていることにお気づきになったでしょうか？まるで、これから言わんとすることへの疑いを先に和らげ、より確固たるものにしようとしてされているかのようです。イエス様の約

束は、破られることはありません。「天と地は過ぎ去るだろう。それでも、わたしの言葉は決して過ぎ去ることがないのだ」（ルカによる福音書第 21 章 33 節）と、念を押されています。決して破れることのない、イエス様がわたしたちに与えてくださった約束、その安らぎの中で休もうではありませんか。

さて、この時点で、「イエス様から、すばらしい約束が与えられていることは本当です。ですが同時にイエス様ご自身から、多くの厳しい言葉が語られていることも事実です。たとえば、自分の十字架を背負い、イエス様の後について行くこと、また、自分の父、母、妻、兄弟たち、子供たち、自分の命さえも憎まなければならないこと（ルカによる福音書第 14 章 25 節から 33 節）などを言われています。」このように異論を唱える方もいらっしゃるかもしれません。これは否定できないことです。イエス様は確かに、柔和で思いやりのあることも言われていますが、厳格で厳重なことも言われました。それだけでなく、後の聖書内で見られるように、パウロを含む使徒、特にヤコブは、教会内で正しい働きをしない者たちを厳しく叱責、非難しています。さらに、ヨハネの黙示録では、イエス様自ら、不信心な教会や人々を脅威されています。このように、すばらしい約束が与えられてはいるものの、恐るべき脅威や叱責、厳しい言葉も受けるかもしれないということも、また真実なのです。では、そのような恐ろしく、また厳格な聖句によって、救いの約束は取り消されるのでしょうか？脅威や裁きはどうでしょう？どちらをもってしても、約束が取り消されることはありません。つまり、約束が取り消されるに値するものは何もなく、イエス様の約束はすべてに勝

るのです。旧約聖書も同じではなかったでしょうか？アブラハムは契約を受け、その後、律法が作られました。さて、その律法は神からの契約を帳消しにしてしまったのでしょうか？否、そのようなことはありませんでした。「わたしの言う意味は、こうである。神によってあらかじめ立てられた契約が、四百三十年の後にできた律法によって破棄されて、その約束がむなしくなるようなことはない。」

（ガラテヤ人への手紙第3章17節）この箇所では使徒パウロは、正に、このことを説明しています。実際、旧約聖書の99%以上は律法について書かれています。神は、自分の言葉で約束を取り消すことができるのでしょうか？そうではありません。使徒パウロはガラテヤ人への手紙の同じ章の中で続けて、律法や聖書に見られるすべての事柄で、この救いの約束と矛盾するものはない、と語っています。

「では、律法は神の約束と相いれないものか。断じてそうではない」（ガラテヤ人への手紙第3章21節）と。聖書を読むとき、わたしたちはイエス・キリストへの信仰からでなく、律法というメガネを通して理解しがちであるという問題が、しばしば起こっています。新約聖書でも同じことのようにです。これが、ヨハネによる福音書第6章47節と、ルカによる福音書第14節25節から33節が矛盾しているように見える理由です。しかし真実として、ルカによる福音書第14節25節から33節でイエス様が語られている厳しい行いを全うできる人はいません。ヨハネによる福音書第6章47節に書かれていることを信じる人には、自然とルカによる福音書第14節25節から33節が自然な成り行きとなるのです。わたしたちに与えられた約束は、どんな理由によっても取り消されることはありません。

ですから、約束をしっかりと心に留め、諦めることのないようにしましょう。わたしたちの目が見るもの、わたしたちの感情や自分の心が語ることに従わず、イエス様の約束を信じましょう。多くの
人々や悪魔は、この約束をわたしたちから奪い去ろうとします。しかし、諦めたり、手放したりしないでください。また、どんな些細な妥協もしてはなりません。この約束はわたしたちのものです。そして、わたしたちは、死にいたるときまでも、この約束を握り続けるのです。わたしたちは心をしっかりと定めなければなりません。イエス様は、忠実なお方であり、約束されたことを確実に、成就することができると思えるのです(ローマ人への手紙第4章21節)。十字架と復活を通し、わたしたちは、このお方、イエス様こそがこの世の救い主であり、忠誠で誠であるという確信を受けています。イエス様は、約束を必ず守られます。十字架でのイエス様のあがないによって得た救いは、イエス様への信仰によって受けることができます。これがヨハネによる福音書第6章47節での約束が教えていることなのです。しっかりと握り締め、力の限り手中に収めていきましょう。

ここまで、この一節への基本的な理解と、約束を受けることの重要性をみてきました。それでは、わたしたちの生活で見られる恩恵やその約束の適用をいくつか見てみましょう。すべてを書き上げることはできませんが、最もよきこと、最も栄光たることを数点、ご紹介したいと思います。

まず、何よりも素晴らしいのは、平安、愛、神へ完全な信頼を置くということ、また、イエス様と友情という関係性を得るという

ことです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」イエス様は救い、永遠の命、天の御国、わたしたちが得るもの、そして神がくださる分け前です。イエス様を信じることで救われる、ああ、神、わたしたちは過去、現在、未来において、イエス・キリストを信頼します。恋に落ちたかのようなのです。この救いは、何とロマンチックなものでしょう。わたしたちの魂の恋人です！ヨハネは、第一の手紙で、「イエスがキリストであることを信じる者はだれでも、神から生まれた者です」（ヨハネの第一の手紙第5章1節）と語っています。イエス様を信じた瞬間、わたしたちは生まれ変わります。死人の中から生かされ、新しい命を与えられるのです。そして救い主へと目を向けるように、目が開かれます。イエス様はすぐ側にいらっしゃいます。直に顔をあわせているかと思えるほど近くに。だれがわたしたちに命を与え、わたしたちを愛されているのでしょうか？わたしたちは、その方を知っています。イエス様は、わたしたちのすべて、わたしたちの息、わたしたちの唯一の願いです。イエス様のことを思い空想している時間、そして兄弟、姉妹と共に主を賛美する時間が、その日の至福の時間となります。わたしたちは主にあって一つです。そして、教会という主の体は、全くすばらしいものです。主が頭で、わたしたちはその体、主はわたしたちの内におられ、わたしたちは主の内にあります。主はすべてなのです。わたしたちは主の知識、愛、恵みにおいて豊かになり、主と共にあること、ただそれだけが最大の望みとなります。それ以外には何も望むことはなく、「主イエスよ、早く来てください」と祈りも一つにまとまるのです。

ここで、何千ページという分厚い本で説明するよりも、わたしの
お伝えしたいことが明確に表れている詩をご紹介します。イエス・
キリストを思う気持ちが表現されている詩です。

完全な体、イエスの再臨、ため息と共に待ち焦がれる

心を無にして、わたしの体を主の体へとささげよう

ああ、もっと一つに

主を賛美し、自分たちの命は捨て去ろう

イエスでなければ死を選ぶ

わたしの元へ来られ、助けてくださった

わたしに触れ

いやされた

恐怖に脅え、死の床にいたわたしを

助けてくださった

共に集い、感謝をささげよう

愛し合い、ささげあおう

互いを受け入れ

主を知り、主を待つ。天と地がなくなり、そしてそのとき向き合う；

御前にひれ伏し悟るであろう、その方が神であると。ほかのだれで

もなく；わたしたちは養われ、その甘い住処に溶けてなくなった

喜びの涙、心の嘆き、切なさが募る。主のその完全な美しさの前に

美しさは光り輝き、白く、清く、純粋な方 — 何と聖なる心だろ

う；主は良き方、わたしたちはその方を切望する

なくてはならないもの わたしたちの息 わたしたちは息をのむ

主はわたしたちの命、主は命そのもの
あなたの愛を教えてください。わたしの心を取り去ってください
あなたの愛は光り輝く
あなたの愛を教えてください。待ち焦がれているのです
あなたの心を見せてください。そして愛していると告げて欲しい
わたしを願い求めると、わたしのことを待ち焦がれると、
わたしなしではだめだと、そして、あなたの喜びであると
わたしはシャロンのバラ 荒野のユリ
わたしに巡り会い、共に過ごすことがあなたの望み
わたしの心も、常に同じであるように。あなたと永遠に；いつもあ
なたの御前に

イエス様は永遠に、わたしたちの一部です。わたしたちの最大の望みがイエス様でないのであれば、それは、わたしたちの心があるべき所にはないからです。愛し合う恋人たちが大海に阻まれ、長い間会うことができないとしたらどうでしょう？その恋人たちの唯一の望みは、再び二人で過ごすことではないでしょうか？また、もしまた一緒に過ごすチャンスがあるのに、「いいえ、結構です。わたしたちは離れていたほうがいいのです」と言ったなら、どうでしょう？それが愛と呼べるものなのではないでしょうか？中にはそのような愛もあるのかもしれませんが、大多数の人は、それが真の愛かどうか疑うのではないかと思います。わたしたちとイエス様も同じなのです。今、離ればなれであるにも関わらず、一番の願いが、向かい合い、共に過ごすことではないとしたらどうでしょう？再会の日が早

くなるようにと願わないのでしょうか？（ヘブライ人への手紙第9章28節、ペトロの第二の手紙第3章12節）イエス様はわたしたちの最大の宝です。わたしたちの喜びです。わたしたちは主を喜び、心に思いめぐらすのです。

イエス・キリストご自身である、永遠の命を受ける者となったとき、わたしたちは完全となります。イエス様を受け入れ、満たされたことにより、神からの召命を成し遂げました。つまりそれは、「霊的にすばらしい人」になる必要ないということです。あなたはすばらしい方で、あなたに勝る人はいないのです。イエス様が内に生まれ、これからの人生は主を楽しみながら過ごすのです。主イエス様にあって、不公平は存在しません。主を信じる者にはみんな、内に同じ方が住まわれています、それは、イエス様ご自身なのです。劣等感を感じることもありません。目を開いてイエス様を見上げるだけでいいのです。イエス様はあなたの受けたすばらしい冠であります。嗣業であるイエス様へ目を向けるだけでいいのです。

さて、そろそろ次に進みます。次は、約束から受ける恩恵へと進みたいと思います。イエス様を信じた方はだれでも、力を得ます。永遠の命を持っているとしたら、何かあなたが傷つけることができましょくか？永遠の命を持つあなたに、弱さを覚える理由はあるのでしょうか？そのようなことは決してありません。そして、わたしたちは、そのことを信じなければならないのです。永遠の命は、約束されています。聖書から、イエス・キリストは弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられる（コリント人への第二の手紙第13章4節）ことが分かります。わたしたち

も同じように弱いのです。ですが、イエス様の復活によって、神の力を直接受ける者となりました。わたしたちは、キリストの犠牲によってではなく、その復活によって生きるのです（ローマ人への手紙第6章4節から5節）。主イエス・キリストはわたしたちのために、十字架の上で亡くなられました。そしてその血で、わたしたちの救いへの代価を支払われたのです。けれども、主は死にとどまらず、復活されました！生きているのは、もはやわたしたちではなく、キリストがわたしたちの内に生きておられると、聖書は教えています（ガラテヤ人への手紙第2章20節、コロサイ人への手紙第1章27節）。ここでいうキリストとは、復活されたキリストです。わたしたちの内に生きられ、わたしたちはこの生きるキリストの力によって生きているのです。

わたしたちはイエス・キリストという永遠の命を持つ者ですから、その生活の中にある弱さへは、どんな言い訳も通用しません。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」このことを、しっかりと頭に叩き込みましょう。実際、わたしたちはこの命を分かち合っているのですから。

確かに、わたしたちへの反発の声は限りなく、わたしたちの感情も常に変動します。しかし、わたしたちには、命と、わたしたちの心にある敵をも支配する永遠の命の力が宿っていることを信じてください。「あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあって、さらに力強く支配するはずではないか」（ローマ人への手紙第5章17節）と語られているのです。ヨハネによる福音書第6章45節、わ

たたちに授けられた約束が語られている2つ前の節でイエス様は、「預言者たちの中に、『彼らはみな神によって教えられるだろう』と書いてある」（ヨハネによる福音書第6章45節）とされています。「あなたの子らはみな主に教をうけ、あなたの子らは大いに栄える」と、イザヤ書第54章13節でも見られます。また、同じ書の中で、以下のようにも語られています。「『すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる。これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である』と主は言われる。」（イザヤ書第54章17節）これはわたしの愛する聖句です。なぜなら、嗣業のすばらしさを垣間見ることができるからです。父なる神の教えであるイエス・キリストへの信仰。それを受けた人々への嗣業とは、なんとすばらしいことでしょうか。どんな敵がわたしたちを傷つけることができるのでしょうか？絶望や罪が、あなたを打ち砕くのでしょうか？いいえ、わたしたちは、何に対しても、決して屈することがありません。「すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない」のです！あなたを苦しめ続けていることや、悩ませている人などがいますか？責められ、また自らを責めていませんか？罪悪感に苛まれていませんか？「すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる」のです。ですから、そのような悩みは起こり得ません。神のために、必死になって、すべてを犠牲にする決心をしなければならないのでしょうか？あるいは、何度も何度も、悔い改めをし続けなければならないのでしょうか？そうではありません。「『彼ら

がわたしから受ける義である』と主は言われる」のです。義とは、善行や自らに課した修行によって得られるものでしょうか？いいえ、違います。義とは、無償で与えられた嗣業、神から受け継いだものであり、「これが主のしもべらの受ける嗣業」と書かれているとおりなのです。では、主のしもべらの受ける嗣業がこのようなものであるのなら、神の子が受ける嗣業とは、どれほどすばらしいものとなるのか、想像に難くないでしょう（ヨハネによる福音書第1章12節）神の子となったわたしたちは、イエス・キリストをとおり、永遠の命という嗣業を受けています。今、あなたは、その嗣業を喜びを持って、受け継いでいますか？そうであると望みますが、もしそうでなければ、次のことを考えてみてください。たとえば、ある父親が息子に、遺産を残したとします。息子がもし、それを拒否したり、軽視した場合、父親の気持ちはどうでしょう？少なくとも、いい気持ちはしないと思います。イエス様をこの世に送りだされた神を、わたしたちが信じないと拒否するなら、それは、この親子の例と同じこととなります。神は、すべての良きことを、イエス様にあってわたしたちに授けてくださっています。もし、わたしたちが弱き者のまま、信仰も持たずにいれば、それは神から授かったものを拒否しているのと同じなのです。あなたの父親が、ステーキとロブスター、それに選び抜かれたワインを準備しているのに、乾いたパンと濁った水の方を選んだら、父親はどんな気持ちになるのでしょうか？きっと、がっかりと落ち込むことでしょう。ですから、わたしたちは、神から与えられた嗣業をしっかりと引き継がなけれ

ばならないのです。力の限り、握り締めていきましょう（マタイによる福音書第11章12節）。

次に、イエス様への信仰によって得られる力と権利について、数箇所、聖句を見てみましょう。ヨハネによる福音書第1章12節では、「しかし、彼を受け入れたすべての者たち、その名を信じた者たちに、彼は神の子供となる権利を与えた」とあります。神の子供となる権利を得たのです。神の子供が、悪事を働くでしょうか？いいえ、神の子供は、完璧です。その力を得たのです。同じく、ローマ人への手紙による手紙第1章16節でも、「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である」と、その力について語られています。あなたは救いを必要としますか？あなたは救いの中にいますか？もし、ご自分が非力だとお考えなら、まだ救いの中にいるとは言えません。どのような悩みであろうと、悩みがあるのなら、あなたには救いが必要です。神のお力が必要です。では、どうすれば力を得ることができるのでしょうか？キリストの福音を信じればいいのです！もう一つ、イエス様をとおして得られる力について語らえている箇所を見てみましょう。テモテへの第二の手紙第1章7節です。そこには、「というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである」と書かれています。イエス様に信仰を持つわたしたちは、これらの力、愛、慎みを備えています。手に入れようと努力する必要はありません。この救い、救い主への信仰から得られる力を持って、歩みましょう！

さて、イエス様を信じることによって受ける恩恵はほかにもまだあります。それは、わたしたちが完全になるということです。これは、御前で、「位置的に完全となる」居場所を得ることであると、多くの方がお考えのようです。この完璧な位置とは、イエス・キリストの体であるメンバーとしての場所を指すと考える教えがあります。この教えから言えば、イエス様のあがないによって、わたしたちが罪人であっても、神はわたしたちに罪をお認めにはなりません。わたしたちは罪深き者であるにも関わらず、完全なる者です。そして、この考えは、「相対的な完全さ」へと続きます。信仰を持つ者たちは、少しずつ成長し、清らかさ（神聖さ）を増していけるよう、設けられた完全さの段階を経ながら全人生を歩みます。「究極に完全である」という状態は、わたしたちが、霊にあって復活した体を受け天の御国に入るまで手に入れることはできません。

この教えをまとめますと、わたしたちは御前にあって完全ではあるものの、この地球上での全人生を、罪深き状態から少し罪深さが軽減した状態へと進み、罪のない完全な霊にある体を授かるのは、最終的な救いの時となります。その時まで、わたしたちはこの肉体に住み、嘆きながら歩んでいかなければならない、と教えているのです。しかし、このような教えは、全くばかげています。罪から罪へなどと、わたしたちは進みません。わたしたちは栄光から栄光へと進むのです（コリント人への第二の手紙第3章18節）。栄光から栄光へ進むことこそが、罪から自由への解放を意味しているのではないのでしょうか（ヨハネによる福音書第8章33節から36節）？ 永遠の命を「持っている」のに、どこに暗闇があるというのでしょうか？

永遠の命を持つこの瞬間に、どのような欠陥があるのでしょうか？
「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」のです。

わたしたちが、いかに「位置的」のみならず、「経験的」にも（考え、言動すべてにおいて）完全であるかという証拠を、聖書から聖句を引用し長々のご説明することもできるのですが、それは遠慮したいと思います。クリスチャンとは、いかに完全で罪のない人々であるかと説明するために、長い聖句リストをご紹介しますより、ヨハネによる福音書第6章47節でイエス様が仰っていることを、ただただ信じていただきたいと願います。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」ここにある言葉は、とても単純で明確です。自分が見聞きしたことに左右されず、また他人にどう思われているかなどに惑わされることなく、ただこの約束をしっかりと持ち続けましょう。

「でも、やはりわたしは罪深き人間です。どんなに一生懸命頑張っても、また罪を犯してしまいます」と、多くの方が反論されることも分かっています。声を大きくして言います。ご自分を、罪人で罪からの解放がない人間だと思われる理由は単に、イエス様がなされた御業を、そして今もなされ、これからもなさる御業を信じていないからです。イエス様が、信じる者たちのために行うと言われた御業を、信じていないのです。イエス様は、あなたを赦し、罪から解放し、永遠の命を与えるために来られました。それでも尚、自分は罪人だと信じるのなら、あなたは正に罪人です。イエス・キリストへの信仰によって、神から義とされたと信じることで、あなたは

義となるのです。もう一度、同じ言葉をいいますが、イエス様への信仰を持っていながら、尚、自分は罪人だとお考えであるのなら、それは、劣った福音を信じ、受け入れてしまっている結果なのです。そのために罪が生まれるのです。また、イエス・キリストの約束を幼子のように受け入れていないが故に、弱く、否定的な考えを持ち続けているのです。そして、イエス様への信仰によってではなく、律法というメガネを通して自分を見続けているせいなのです。イエス様はわたしたちに、永遠の命を約束されました。どうして疑うのでしょうか？たとえ天と地が否定したとしても、わたしたちは約束を信じましょう。あなたの目が見たもの、耳が聞いたものに頼らず、信じるのです！あなたの心や道徳心が何を語っても、主を信じましょう！どんな悪魔のささやきにも耳を傾けず、主を信じましょう！心に浮かぶ非難の声にも負けず、主を信じましょう！わたしたちには永遠の命があり、そしてイエス様ご自身が約束された通り、自分は完全なものであると信じるのです。

ここでイエス・キリストを信じるすべての方々に、考えていただきたいことがあります。イエス・キリストの十字架の意味は何でしたか？罪の死ではなかったか？ローマ人への手紙第6章1節から11節を、ぜひ、注意深く読んでいただきたいと思います。ここでは、キリストとの死と共に罪は死に、わたしたちはキリストの復活によって生きている者であると、明言されています。ですから、もし、まだ罪が存在すると信じ続けるとすれば、それは本質的に、イエス・キリストの死は無意味で、十字架での成就是失敗に終わったと考えているということになります。自分はまだ罪人であると信じ、

毎日毎日、何年経っても、懺悔と悔い改めを続けているとすれば、それは結局、イエス様の死に何の意味も見い出していないということなのです。それだけでなく、イエス様の死以前である旧約聖書の時代を生きているのと同じなのです。旧約聖書の中では、毎日、罪のため犠牲がささげられました。しかし、その犠牲では、ささげる人々の良心のとがめがなくなることはありませんでした。（ヘブライ人への手紙第10章1節から3節、10節から11節）。しかし、イエス様の死は、一つのささげ物によって、永久に完全にされたのです（ヘブライ人への手紙第10章14節）。わたしたちが、自分は罪人であると信じ続け、罪の告白や悔い改めが繰り返し行われるのであれば、十字架での御業が失敗であり、何の価値もなかったと信じていることになります。十字架による犠牲は、旧約聖書で語られる動物によるいけにえと、なんら代わらないのでしょうか？（これはイエス様の血を、何度も繰り返し懇願するときに、わたしたちが持つ本質です。何度もキリストをいけにえにしているかのようです）。イエス様は、一度だけ死なれました。そしてわたしたちは、罪と罪の意識から解放されました。わたしたちは、旧約聖書で契約を受けていた人々より、優れた約束を持っているのです。（ヘブライ人への手紙第7章22節）。ですから、どうぞ、イエス様を信じ、臆病な生き方を捨ててください！「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。

さて、ここまで進んできましたが、完全さについての説明で混乱されている方もいらっしゃるかもしれません。この完全さとは、罪がない、という意味です。罪とは、法律に違反するものをいいます

が、罪がないとは、神の法を全うすることを意味します（ヨハネの第一の手紙第3章4節）。ですが、この法への全うを、一言で言い表すことができます。それは、「愛」です（ローマ人への手紙第13章10節）。コリント人への第二の手紙第3章18節では、イエス様を信じた後、栄光から栄光へと（罪深き状態から、少し罪深さが軽減した状態ではなく）変えられていく、と書かれています。栄光から栄光へと変えられていく、これは、愛のある姿から、愛に溢れる姿へと変わっていくことを意味します。栄光から栄光へと変えられていきますから、わたしは今日よりも明日、より深く人々を愛するでしょう。この栄光から栄光への変化は、一生を通じて続きます。主なるイエス様が、いよいよ再臨される時、わたしたちは完全なる栄光の姿になるのです。

ここで取り扱っている完全さは、自分は今もう完全だと、傲慢になってしまう方が出てしまう危険性を伴う、繊細なテーマのようです。ですが、傲慢になる必要など、全くありません。イエス・キリストが地上に来られ人類の罪のために死なれた時、イエス様の心にあったのは、一人ひとりの人間をいかに神聖で罪なき者にするか、ということではありませんでした。その御心にあったのは、教会という完全な体を作ることだったので（使徒行伝第20章28節、エペソ人への手紙第5章25節から27節）。つまり、イエス様の御心は、各個人の義ではなく、信じる者で作られた体全体、共同体としての完全さへと向けられていました。わたしたちが全体として不完全である限り、一人ひとりの信じる者が究極の完全と成り得ることはありません。わたしたちが一つの完全なものとなるまで、この全体と

しての体は成長し続けます（エペソ人への手紙第4章12節から13節）。そして、イエス様が戻って来られるその時、わたしたちは一つとして集められ、完璧で神聖で、栄光の姿の教会となって、イエス様をお迎えするのです（エペソ人への手紙第1章10節、第5章25節から27節）。イエス様と直接お会いする再臨の時に、体であるわたしたちは頭とつながり、そして、主と共に永遠に、完全な一つとなるのです。ハレルヤ！

信じる者たちの完全さへの結論として、もう一度だけ書き添えます。究極の完全と栄光とは、一人ひとり、個別の信者に見られるものではありません（ヨハネによる福音書第17章23節、ヘブライ人への手紙第11章40節）。ですから、互いに愛し合いなさいと、新約聖書で何度も何度も語られているのです（ヨハネによる福音書第13章34節、ローマ人への手紙第13章8節、エペソ人への手紙第5章1節から2節、ヨハネの第一の手紙第3章11節など）。イエス様の最大の目的は、わたしたち信じる者が互いに愛し、愛され、神の御子の栄光の恩恵を受けながら、イエス様の体にあって完全となることです（ヨハネによる福音書第17章23節から24節）。すべての信者が一つの体として完全となる瞬間、その瞬間こそ、一人ひとりの信者が究極の完全たる者となるのです。人が大天使やイエス様ご自身のように神聖だったとしても、もし体として不完全であるなら、その人には何の利益もありません（コリント人への第一の手紙第12章26節）。体は苦しみの中にいるのに、自分を大天使と同じように神聖であると考えている人がいるとすれば、その人は単に自分を欺いているのです。共に体を構成するメンバーから受ける、

愛や滋養の必要性から目を背けているのです。わたしたちには、お互いが必要です。体の中で必要のない部分などないのです（コリント人への第一の手紙 12 章 20 節から 27 節）。すべてのメンバーは、みな同じように不可欠で、わたしたちの究極の完全さは、頭であるイエス・キリストにあって一つとなるときに成し遂げられます。すべての体を構成するメンバーは、頭であるイエス様への信仰によって成長します。イエス様への信仰の結果、わたしたちは、主の体内に生きます。そして、イエス様がわたしたちを愛し、寛大であるように、わたしたちも互いに気遣い合い、愛し合うのです（エペソ人への手紙第 4 章 15 節から 16 節）。

この約束から受ける恩恵に関して最後にお話したいことは、自由についてです。正しく言いますと、安息と愛への自由がわたしたちには与えられています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」わたしたちは、イエス様という永遠の命を持っているのです。あなたに足りないものはなく、また手に入れようと探しあぐねるものもありません。それだけでなく、わたしたちには、恐れることは何もないのです。このように、わたしたちには真の安息と偽りのない愛があります。この二つのテーマについては後ほどご説明しますが、本章でも少し、この愛と安息という二つのテーマについて触れたいと思います。

安息への自由は、イエス様を信仰するわたしたちにとって、すばらしい恩恵です。「労苦し、重荷を負わされているすべての者よ、わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方に安らぎを与えよう。」イエス様はこの言葉と共に、わたしたちを安息へ

と招かれました。安息とは、救いと直接的に関係しています。ヘブライ人への手紙第4章では救いを、神の安息に入るとたとえています。神が天地創造の7日目に休まれたように、わたしたちも神の安息へと入るべく、自らの業からの休みが必要です（ヘブライ人への手紙第4章4節、10節）。疲れたものは、真の安息を得、神がそのすべての荷を背負ってくださることを知ります。救いとは、永遠の大安息日に入るようなものなのです。このような安息を知るすべての人々に、「ハレルヤ」の叫びを！

わたしは個人的に、安息を、心の平安と静寂という点に結びつけて考えるのが好きですので、次のイザヤ書26章3節は特に好きな箇所となっています。そこには、「あなたは全き平安をもってころごしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」とあります。持続する心の安らぎと落ち着きという性質は、わたしたちの嗣業であり権利です。イエス様にあつて信仰を持つ者として、このことを理解しなければなりません。イエス様が安息の状態にわたしたちをとどまらせてくださることを期待しましょう。たとえわたしたちが今、どんな状況にあったとしても、イエス様は必ずそうしてくださいます。そして同時に、安息は義務ではないことも、覚えておいてください。イエス様にあつて、わたしたちは完全な自由を得ています。ですから人は、休まないことを望むことも許されています。たとえば、同じ信仰を持つ人や家族に助けが必要だというような、緊急の場合があるかもしれません。愛のために、緊急を要すると感じ、まるで主の王座の前で何度も執拗に嘆願するかのように、自らの休息を拒み、本当にその嘆願を成就させようと

肉体的に可能な限り、体を疲労させるかもしれません。その人は安息の自由を持ち続けますが、愛するという自由もまた、彼のものなのです。その愛するという自由が、彼に行動を起こさせるということも、多くあるのです。

さて、次へ移りたいと思います。わたしたちは、愛する自由も授かりました。「愛は、わたしたちが神を愛したことにあるのではなく、その方がわたしたちを愛し、ご自分のみ子をわたしたちの罪のための贖いの犠牲として遣わしてくださったことにあるのです。」

(ヨハネの第一の手紙第4章10節) わたしたちは、神からの無償の愛を受けたという、ただそれだけの理由で、愛する自由を授かりました。神の愛は、愛することを知らない者たちへの神の愛に表れています。では、どのように愛してくださったのでしょうか？わたしたちのあがないのために御子をこの世へと送られ、そして、わたしたちのために、ご自身に、その神の怒りを浴びせられたのです！神の愛については、多くの場合、ごく一般的な言い方で語られています。たとえば、日々の食べ物や必要なものを備えてくださるといった神の愛がありますが、このような一般的な愛は、神の愛ではありません。この節では、どこに神の愛を見ることができるのか、はっきりと書いてあります。そうです！御子をお送りになったという神の愛が指摘されています。御子を送られた神への知識がなければ、わたしたちは決して神を正しく語ることは出来ません。また、神の御子を先に信じられないのであれば、決して、父なる神を信じることはありません。わたしたちは神を愛していませんでした。しかし、さきに神がわたしたちを愛していただきました。そのため、わたし

私たちは、その神からの愛を知り、信じたのです（ヨハネの第一の手紙第4章7節から21節）。これがわたしたちの愛のはじまりです。同じく、ヨハネの第一の手紙の中で、完全な愛はわたしたちの恐れを投げ捨てると書かれています。恐れのあるところでは、愛は完全ではありません。恐れは、完全に信頼を置く、自分を献げるということを出来なくさせるからです。しかし、イエス様を信じたとき、愛する自由が授けられます。罪への恐れもなく、主の御前にあつて足りない者でもありません。傷つくこと、人による裏切り、そのような恐れはもう必要ないのです。わたしたちの信仰はイエス様にあり、愛によってもたらされます。なぜなら、わたしたちは自由と愛する能力を手にし、その愛は互いのために喜んで命を捨てられるほどなのです。この愛については、第4章でもっと詳しく触れたいと思います。愛とは、イエス様を信じることにより生まれ出る実です。そしてその愛はすべてに勝るのです。

この章ではイエス・キリストへの信仰により、わたしたちに与えられた救いの偉大さをご説明してきました。イエス様を信じる人すべてが瞬時に、救いを受けることができます。イエス様へ自由に近づくことができます。あなたのいる場所、過去にしてしまったこと、また、今あなたがしていることなど、何も心配しなくてもいいのです。イエス様の御父は、あなたが非力であることをご存知です。だからこそ、あなたが神によって生きるように、この世にイエス様を送られたのです（ヨハネによる福音書第6章57節）。あなたが知るべき唯一の名前はイエス様の御名だけです。その御名だけを求めましょう。ほかの名はありません、イエス様が神です。この方こそ

真実の神、また永遠の命です（ヨハネの第一の手紙第5章20節）。この方は誠実で、その言葉は決して過ぎ去ることがありません（ルカによる福音書第21章33節）。今、ここで、無償の救いを授けてくださいます。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」あなたがこれまでに、どんなことをされたのかは関係ありません。どんな報いも、人への罪の告白も、主への約束も、何も必要ないのです。後にも先にも、条件などありません。この方が、あなたの過去、現在、未来への全責任を、ご自分に課してくださっています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」のです。わたしはすべてにおいて、主を信じています。とても誠実にしてくださっていますし、わたしには、この章で書き上げてきたことすべてを、していただきました。もし、疲れ、重荷を背負っているのであれば、あなたには救い主が必要です。主を信じましょう、この今の瞬間、この場所で。あなたへの救いは、忠実になされ、豊かな命が与えられるでしょう（ヨハネによる福音書第10章10節）。すでにイエス様を信じてはいるのに、イエス様にある嗣業をまだ十分に持っていないという方へ、特に聞いていただきたいことがあります。どうか、ここに書いてきたことを受け入れてください。ここに悪魔はいません。ここにあるのは、ふんだんな安息と良きこと、そして愛です。「労苦し、重荷を負わされているすべての者よ、わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方に安らぎを与えよう。」（マタイによる福音書第11章28節）わたしの最大の望みは、以下の節に表れています。「わたしたちすべての者が、神の子を信じる

信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。」（エペソ人への手紙第4章13節）ここに書いてきたことをいくつか試みてください。そしてそれが善か悪か、ご判断ください。ぜひ、勇敢になり、信じてみてください。弱気になって祈り、待ち続け、そしてまた祈り、待ち続ける、そのような必要はないのです。そのような受身の待ち人にはならないでください。主を信じましょう。主はあたなに、はっきりとこう仰っています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と。アーメン。

第2章：イエス・キリストにある新しい命

本書では、これから2つの章にわたり、キリストにある新しい命に焦点を当てていきたいと思えます。第1章では、救いとは何か、どうすれば救いを受けられるのかを見てきました。具体的には、救いとは、イエス・キリストを信じる人すべてに与えられた永遠の命の約束により、もっとも明確に示されるものであることを学びました。さらに、永遠の命（永遠の命とは、事実、イエス様ご自身です）を受けることからの恩恵は、完全な自由と栄光、満ち溢れる力、安息、そして愛であることも続けて学びました。このように、イエス様がわたしたちに与えてくださった救いの宝物についてはすでに説明してきましたので、この本の残りの章では、このすばらしい救いについて、より詳しく見ていくことに努めたいと思えます。さて、わたしたちはイエス様を信じる時、聖霊によって洗礼を受け、イエス・キリストの体内に入り、そして新しく創造されたものになりました（コリント人への第一の手紙第12章13節、コリント人への第二の手紙第5章17節）。わたしたちは生まれ変わり、新しい人生を歩き始めたのです。では、この命はどのように現れ、どのように見えるのでしょうか？こうしてキリストのもとに生まれた新生児たちは、どのように育てられるべきなのでしょう？何を食べさせればよいのでしょうか？この章では、キリストを信じる人の幼少期についてお話したいと思えます。すべてはここから始まります。よい育て方をされた子供は、よい人間に育ち、そうでなければ、その子供は惨めなこととなることでしょう。

イエス・キリスト信者の誕生をお話するにあたって、まず、その新しい命はどのようにして生まれるのかをお話したいと思います。まだイエス・キリストを救い主として信じていない方、イエス様を信じてはいても、自分の信仰は劣り、十分でないと感じている方、そのような方々の助けになることを、いくつかお伝えしたいと思います。とても重要で、そしてこの章に関係してくることです。なぜなら、生まれ変わるために必要不可欠な要素は、イエス様への信仰、ただそれだけだからです。さて、まず命は、わたしたちがイエス様を信じたその瞬間から始まります。つまり、イエス様を信じたときが、わたしたちが受胎した瞬間です。さらに、使徒パウロが「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたように、彼にあって歩きなさい」のように語ったとき、わたしたちの全人生がキリストと共にあるようにルールが敷かれました(コロサイ人への手紙第2章6節)。わたしたちはイエス様をどのように受け入れたのでしょうか？答えは簡単です。イエス様を信じることによって、イエス様を受け入れました(ヨハネによる福音書第1章12節、ヨハネの手紙 第一の5章1節)。ですから、最初にお伝えしたいのは、つまずきや感情の乱れがあっても、それを絶対に、自分の不信心の口実にはしないでいただきたいということです。信じられなくなったときでも、とにかく信じ続けてさえいれば、イエス様はあるがままのあなたを、そのまま受け入れてくださいます。残念なことに多くの方が、「聖書を読み、祈り続けなさい。神があなたの心の中に現れ、信仰を与えてくださるよう祈るのです。わたしもまた、あなたのために祈ります。」というアドバイスを受けているようです。

そして福音さえも、「祈り、待ち、信仰を受け入れる者は、永遠の命を受けるのです」と捻じ曲げられたものとなってしまっているようです。これは本当に残念なことです。しかし、コリント人への第二の手紙第 6 章 2 節の中に、こうあります。「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である』」と。救いのときは今日なのです。祈り、待つ必要はありません。ただただ信じ、もし信じられなくても、信じるしかないのです。イエス様は、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と言われました。もう言い訳や、待つのは止めましょう。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」のです。

さて、次にお伝えしたいことは、イエス様への信仰は、多くの場合、身勝手な行いだと見られがちだという点です。少なくとも、世間の目はそのように見ているようです。なぜなら、イエス様を信じることによって、わたしたちは実際、自分にある責めや責任、そして罪悪感を、自分ではないだれかに転嫁しているからです。この世では、わたしが自分の犯した悪事の責めを、ほかのだれかに負わせたなら、わたしは身勝手な人間と見られるだけでなく、臆病者とされることでしょう。ですが、この責任転嫁は、信仰を持った瞬間に、まさにわたしたちに起こることなのです。主への信仰の行動として、わたしたちは、「主イエスよ、これを全部受け取ってください。わたしは自分の罪と責任、そして義務をみなあなたに転嫁します」と言い、主は喜んで、「いいですよ」と言われるのです。その

証しは十字架にあります。主はそれを喜んで背負ってくださいました。そうして、すべてのものの主、指導者であられる方が、すべてのもののしもべとなられたのです。わたしたちが奉仕するのではなく、主がわたしたちに奉仕してくださいます。わたしたちが仕えるのではなく、主がわたしたちに仕えてくださっているのです。もしイエス様が、よい生徒にだけに永遠の命を与えるような教師であれば、わたしたちは「主よ、わたしはすべてのものを売り払い、貧しいものに与え、あなたの行くところにはどこへでもついてまいります」と声高に言うことでしょうか。ですが、主を、自分の救い主として見るならば、わたしたちは「主よ、あなたはわたしのためには何でもしてくださいます。わたしには、あなたについていく資格もありません」と嘆くことでしょうか。ここでお伝えしたようにしている点、それは、わたしたちがイエス様を救い主として信じたとき、わたしたちは実際、本当に身勝手に振舞うことになるということです。そして、それが身勝手だとしても、主を信じるために、わたしたちはそうでなければならないのです。このことをしっかりと心に留めておきましょう。救い主を信じる時、それがわたしたちに起こることだと。人間の自尊心はそれを拒みますが、それはそれでいいのです。「イエス様、わたしはあなたを信じます！あなたはわたしの救い主です！」。

イエス様は、「隣人を、自身同様に愛しなさい」と教えてくれるでしょう。ですが、隣人を愛する前に、わたしたちはすべきことがあります。それは、自分自身を愛するということです。救いのとき、自分の魂への救いが優先され、隣人が求める助けのすべては、その

次となるのです。ですから、たとえ本当に多くの人々が助けを必要としているとしても、また、自分の責任は自分で負うのがごく当然なことだとしても、すべて忘れましょう。ほかの人のことはすべて忘れるのです。「主イエスよ！わたしをお助けください！わたしをお救いください！」

イエス様を信じ、そして主を受け入れるとき、イエス様がわたしたちに仕え、奉仕し、わたしたちの足を洗ってくださいます。これが主の喜びであり、地上に来られた理由なのです。「というのは、人の子も、仕えてもらうためではなく、むしろ仕え、自分の命を多くの人の身代金として与えるために来たからだ」（マルコによる福音書第10章45節）。ここが、わたしたちのとどまるべきところであり、住むところなのです。救い主イエス・キリストを信じることに多くの身勝手さがあっても、これがわたしたちの救いの道、主の御心なのです。

もう一度繰り返しますが（わたしは繰り返してばかりしていますが）、私たちは主キリスト・イエスを受け入れたように、彼にあって歩かなければなりません（コロサイ人への手紙第2章6節）。このような教えは、キリストにある生活を生きるためのルールを敷いてくれました。わたしたちは信仰によって主を受け入れました。信仰の強さ、大きさは関係ありません。なぜなら一番重要なのは、幼子のような信頼の心をもって、イエス様を全身全霊で信じることだからです。つまり、その信仰の度合いにかかわらず、両手を高く投げ出し、ただ次のように言うだけで、主イエス様への信仰の行動となるのです。「わたしはここにいます。わたしはあなたが必要で

す。でもあなたに献げられるものは何もありません。わたしにはしっかりした信心もないし、悔い改めることもできません。わたしはあなたに対する約束も、解決も持っていません。ですがわたしをわたしとして受け入れてください。わたしは自分の全存在をあなたに献げ、命をあなたのお手元にゆだねます。わたしはあなたを過去も現在も、そして将来にも信頼します。わたしはあなたを信じます。」イエス様を受け入れたとき、わたしたちにはイエス様へ献げられる価値のあるものは、何もありませんでした。それどころか、わたしたちの全存在自体に、何の価値もなかったのです。しかし、神がそのような価値のない人間との和解のため、御子を送ってくださったというよき知らせを、わたしたちはただ信じました。神は死んだ者をもよみがえらせ、取るに足りない者に価値を与えてくださるので

ではここで、イエス・キリストにある新しい命とはどのようなものなのかを見てみましょう。キリストにあつての新生児とは、今、イエス・キリストの栄光に、目を覚ましたばかりの人のことです。救い主を見て、自分たちには主が必要だと気づきました。そして、「イエスを信ずるものはだれも、朽ち果てることなく永遠の命を持つ」という福音書のよき知らせを受け取り、信じたのです。イエス様は約束を果たし、自分たちの信頼と希望はそこにあるのだと信じているのです。その信仰は純粹で、喜びは簡潔です。そして、自分の魂に、希望と、苦痛の和らぎを見つけ、その顔は太陽のように輝き、その両眼は星のようにきらめいています。生まれ変わったその姿を見て、周りの人は、「これが同じ人間だろうか?」と驚嘆するこ

とでしょう。そのキリストにあっての新生児たちは、救い主を心から愛しています。イエス様はこの人々の息であり、イエス様と面と向かって会える日を心の底から待ち望んでいるのです。

しかしながら、新生児が弱く繊細なのと同様に、この人々もまた、もろい存在です。さまざまな教えの風に吹きまわされたり、もてあそばれたりする(エペソ人への手紙第4章14節)とあるように、少しの風にも吹き飛ばされてしまうかもしれません。この赤子の中には、疑惑や、偽の教師のたばかりの的になり、また虚偽の光の使いに誘惑されるかもしれません(コリント人への第二の手紙第11章13節から15節)。ですが、どのようなことがあったとしても、イエス様を信じてさえいれば、この小さな者たちは決して滅びることはありません。

この小さな者たちのもう一つの特徴は、父なる神から非常に愛されているという点です。その存在は、地上のすべての国々より尊いのです。地上の生きとし生けるものすべてが消滅し、幽霊になるほうが、これらの赤子の一人が滅びるより楽なほどなのです(マタイによる福音書第18章14節)。小さな者たちを蔑まないように気をつけましょう。なぜなら彼らのためのみ使いたちは、天におられるわたしの父のみ顔を、天でいつも見えています(マタイによる福音書第18章10節)。小さな者たちは、イエス・キリストにとって最も大切な存在で、その思いのすべてを尽くされています。そして教会のリーダー、長老、牧師、教師は、主に小さな者たちのため存在します。イエス様は、これらの赤子の一人に害悪が及ぶのを見るよりは、地上のすべてのものが地獄に落ちるのを見たいとすら思われる

のです（マタイによる福音書第18章6節）。小さな者たちとは、イエス様にとって、このうえなく可愛く、目に入れても痛くないほどの存在です。何にもまして愛されています。そして全知全能の神の刃は、これらの人々をさげすみ、虐待し、軽んじ、冷たくあしらう者たちの上に振り落とされるのです。

さて、この世では、赤子は育って少年少女となり、やがて成人します。イエス・キリストを信じる者たちも同様です。ですが、聖書から学ぶように、そうでない場合も多く見られます（ヘブル人への手紙第5章12節から14節、コリント人への第一の手紙第3章1節から2節、エペソ人への手紙第4章14節）。中には赤子のクリスチャンとして長い年月を過ごし、結局、全く成長しない人もいます。この世の赤子が、きちんとした世話や子育てなしでは強く育つことができないように、クリスチャンの赤子もまた、適切な監督や教育なしでは成長できません。教会とは、礼拝、賛美、そして王の中の王に感謝を献げる場所だけではありません。聖書の学び、祈り、小グループの集まり、地元での奉仕活動と福音主義、貧者への奉仕、世界的な宣教への支援、社会活動などの数多くの活動もあります。しかし、その中でも教会が最優先すべきことは、キリストの赤子たち、つまり若者や弱い人々への世話や気遣いなのです。

このようなことを書き並べてきましたが、それは、自分がどれほど大きな愛で包まれているのかということを確認してもらいたいのからなのです。イエス様を信じている皆さん、皆さんの生活がどのようなものか、またどのように感じ、またほかの人からどのように思われているかは関係ありません。あなたの魂、それが神にとって、

世界そのものよりも価値のあるものなのです。ここから先、本書を通して、どうすればイエス・キリストにとどまり続けられるのかという点を示していきたいと思っています。

では続けて、本章の冒頭部分で触れた、二つの質問に答えていきましょう。キリストのもとに生まれた新生児たちは、何を食べさせ、どのように育てられるべきなのでしょう？

簡単に言えば、これらの赤子は救い主、主なるイエス・キリスト自身のことを食べさせなければなりません。当然のこのようですが、残念なことに、多くの新生児たちは餓死寸前なのです。

お伝えしたいことをできる限り明確にするために、たとえを用いてご説明します。人はそれぞれ異なる経験をしていることは承知しています。ですから、これからご紹介する例は、多くの方には当てはまらないかもしれません。この仮説の話の中にある、特定の状況や経験に注目することは避け、ただ問題の核心にあるものに焦点をあてて行きたいと思います。このストーリーの登場人物である男性の抱える問題は、実際、多くの方が抱える問題と同じではないでしょうか。

ある若者が自分の人生にむなしさを感じ、人生の真の意味を探すことで、そのむなしさを埋めようとしていました。どこをどう歩いたのか、気がつくや教会でイエス様とその十字架についての説教を聞いていました。そこでイエス様を信じ、罪への赦しと新しい命が約束されました。すべてがすばらしい出来事でした。しかし、そこで何かが起きたのです。若者は、ほかのクリスチャンたちが、ただ救い主を思い、空想に身を任せて時を過ごすだけでなく、イエス

様のための奉仕へ生活を献げていることに気づきました。そして、まずは教会での聖書の学びから始め、そして、「主に従って歩むことを望むのなら」、水の洗礼を受けるべきだと教えられたのです。その若い信者は、聖書の学びと洗礼は、教会へ入るための一種の入会式のようなもののように感じました。最終的に何週間かの学びの後、洗礼の日を迎え、正式に教会の一員となりました。キリストとの新しい生活を始め、すべてがすばらしい状態に思えました。教会には毎週出席し、献金もし、小グループの会合にも参加しました。ほかのクリスチャンとの交わりも楽しみました。ですが間もなく、この若者の心にはまた、むなしさが戻ってきたのです。自分の憂鬱や不満足はどこから来るものなのかと混乱し、やがてそれは自分の罪のせいではないかと考えるようになりました。罪からの完全な自由を見い出すことができないのです。さらに若者は、自分の人生に対する主の御心は、何なのかと悩みました。自分に幸福をもたらすものが何かも分からなかったのです。彼は友人に相談し、本を読み、牧師にも1、2度話してみました。そして、この世には罪から完全に自由になる道はない、主を待つことだと励まされたのです。「祈り続け、辛抱強くしていなさい。聖書をさらによく読み、あなたの命のために、主のご意志を捜し求めなさい」と言われたのです。何週間も迷子になったように感じたあと、クリスチャンとしての自分の人生の目的について、何らかの啓示を「受け取り」ました。クリスチャンは「すべての国に行き、そこに弟子を作ることだ」と学んだのです。キリスト関連のことに、より深く集中するように決心を固め、悔い改めも新たにし、地元での伝道活動に励みました。そし

そこで若者は、安心感と心の平和を感じました。それは、すべてをゼロからはじめるのと同じことのようにでした。そうして、数ヶ月が過ぎました…。

このたとえ話の若者は、結局また降り出しへ戻り、浮き沈みの堂々巡りに陥りました。実際、彼に自由は見つけられないでしょう。もし彼がこの物語の終わりに自由を見つけたなら、それはだまされたことになり、さらに何かを失うことにもなるでしょう。この話の中で、若者は主の御心を求め、約束し、悔い改めを新たにし、伝道活動の中に人生の目的を追い求めました。このようなことをすべて行った上で、彼はついに心の和らぎと平和を感じました。確かに、これは、すべてをゼロから始めるようなものでしょう。ですが、この若者は非常に深く、自分自身を欺いています。なぜわたしはこんなことを言うのでしょうか？それは、この若者がイエス様そのものである「自分の初恋を失った」からです。本来、どのような始まったのでしょうか？若者は、ただ福音を信じ、それを信じることに喜びを得ました。このときだれを信じていたのでしょうか？イエス様を信じ、イエス様はするといったことには忠実であること、つまり若者の罪を赦し、自由と永遠の命を与えてくださると信じていたのです。イエス様への信仰を通して、若者は喜びと平和、そして心の和らぎを持っていたのです。自然の聖に満ち、その顔は輝いていました。ですが、「イエス様」から、「クリスチャンがやるべきこと」へと移ったとき、彼は救い主から去ってしまったのです。彼は信じたのですが、彼は誘惑の下で妥協しました（ルカによる福音書第8章13節）。彼の誘惑は、聖書の勉強と洗礼を薦められた瞬間に始ま

りました。わたしは聖書の勉強や洗礼そのものが悪いといっているのではありません。それはいずれもよいものです。ですが、そのような活動は適度にこなさなければ、致命的なものになってしまうのです。この若者は、イエス様の愛をより深く知るよう奨励されるべきでした。救い主の上に安らぎ、救い主を楽しむようにと教えられるべきでしたが、そうはならなかったのです。そのような奨励の代わりに、多くの教会にある操作手順へと進んでしまいました。つまり、人々にイエス様を信じる決心をさせ、それからその人々をほかのことで忙しくさせる、その手順で救い主のことをまったく忘れさせてしまうのです。その人々にとって、最初はイエス様が疑いなく全面的に完全な救い主でした。ですが、知らないうちに救い主であるイエス様より、教師であるイエス様を中心し始めてしまいました。結果として若者はだまされ、自分の救い主から歩み去ってしまいました。

この話の若者は、イエス様に「とどまる」べきだったのです。イエス様の中に命が始まり、イエス様によって命は続きます。イエスは言いました。「わたしのうちにとどまりなさい。わたしもあなた方のうちにとどまっている。枝がブドウの木のうちにとどまっていなければ、自分では実を生み出すことができないように、あなた方もわたしのうちにとどまっていなければ、実を生み出すことはできない。」(ヨハネによる福音書第15章4節)イエス様にとどまるとは、主を信じるという意味です。イエス様を信じるすべての人々は、愛という果実を生み、靈魂の贈り物を自然に楽しみます。ですが、イエス様はまた、「わたしのうちにとどまらないなら、その者は枝

のように投げ出されて枯らされる。そして人々はそれらを集め、火の中に投げ込み、それらは燃やされる」と警告もしています（ヨハネによる福音書第 15 章 6 節）。イエス様にとどまることは、この上なく大切なことなのです。イエス様を信じた後、ほかの人または別のことを重視したり、追い求めて行ったならば、イエス様にとどまったことにはなりません。その結果多くの人々は目的を失い、憂鬱に陥り、気持ちが動揺してしまうのです。そして、罪の念にはまり、病いを患ったようになります。この若者のように、しおれてしまうのです。真の平和は、イエス様を信じることによって見い出されます。信仰とは、わたしたちがクリスチャンとして始まり、そしてとどまる場所なのです。

多くの場合、教会活動や「クリスチャンとしてすべきこと」は、わたしたちの注意を、ただ一つだけ必要なイエス・キリストそのものから、そらせてしまいます（ルカによる福音書第 10 章 38 節から 42 節）。それだけではなく、イエス様にあつての赤子たちには、この世のしがらみが、四方八方から圧力となってその双肩にのしかかっています。突然教会に来るのをやめる人もいれば、教会から教会へと渡り歩く人も出てきます。喜びを失う人もいれば、活動と情熱に突き動かされて数年を過ごし、それでも依然として、自分たちがだまされていることに気づかない人もいます。このような若者たちは、引き続き、*その救いの瞬間に受け入れたイエス様によって、はぐくまれないとかならないのです。救いの瞬間には、教会活動や世間的な圧力など関係のないものでした。関係あつたのは、ただ、魂を救ってくださった主、そのお方だけだったので。信じる

者はその生涯をかけ、救いの瞬間に生きなければなりません。その救いの瞬間は、自分と救い主だけのものでした。そしてその中で生きるとき、イエス様と出会い、そして自然と実を結ぶのです。もし、キリストの赤子たちが誘惑を退けず、救い主からの強引な引き離しへ拒否しなければ、その人生を失敗と罪の中に生きることになってしまいます。毎日、迷いの中に行き、形だけの宗教や、その他のことの中で、だましまし生きるようになるでしょう。

最後に、キリストの赤子はどのように育てられるべきかという点を見ていきたいと思います。簡単な答えはこうです。救い主であるイエス・キリストが心の中に定まって、ゆるぎないものとなるよう、さらに、さらによく知るよう育てられるべきなのです。イエス様は、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と言われました。永遠の命を持つならば、欠けるものなどはなく、求めるものもないはずです。すでに述べたように、永遠の命とは、イエス・キリストです（ヨハネの第一の手紙第5章20節）。そして、イエス様とイエス様を送られた父を知ることによって、わたしたちは永遠の命を生きるのです（ヨハネによる福音書第17章3節）。さらに天なる父が御子をこの世に送られたのは、この世をとがめるためではなく、救うためでした。ですから、小さな者たちは、イエス様はモーセのように重い首かせをつける教師であると教えられるべきではありません。救い主イエスの首かせは軽く、その戒めは痛ましいものではないと教えられながら、育つべきなのです（ヨハネによる福音書第3章17節、マタイによる福音書第11章28節から30節、ヨハネの第一の手紙第5章3節）。洗

礼の水から出てきたその瞬間から、教会での活動に参加するようになると多くの人が直接的、間接的に奨励されます。このような奨励は悪意からではないにせよ、それは間違いなのです。その間違いの理由は、そのような活動がクリスチャンであることの実態だと、多くの人が信じるようになるからです。するとクリスチャン生活が何かをしたり、特定の生き方をすることがすべてとなってしまうのです。そして、キリスト教がほかの宗教と何ら変わらないものへと、なり下がってしまうでしょう。しかし、キリスト教とはイエス・キリストがすべてです。イエス・キリストが始まりであり終わり、アルファでありオメガなのです。これを知った上で、小さな者たちへ救いと命とは、ただキリストへの信仰のみによって得られるものだと語りかけながら、告白の言葉が出るや否や、活動やそのほかのことに駆り立てるのは、まったく意味のないことなのです。わたしたちは、小さな者たちが救い主の中で完全に定まり、その無償の愛と救いを知るよう、助けることに専念すべきなのです。そうすることによって、神への果実は自然に実を結ぶことでしょう。わたしがここで述べていることについて、賛成されない方が大勢いらっしゃることを知っています。ですが、長年教会へ通いながらも、福音や福音の意味するところをご存知ない方が、たくさんいらっしゃることも、残念ながら事実なのです。そのような方の人生は、宗教儀式や「善い行いをする事」へと変わってしまっています。そして、自分は神に喜んでいただいていると考えているようです。しかし神は、愛によって働くイエス・キリストへの信仰だけにお喜びになるのです。この愛は、神の御子に対する知識と、その救いの力を心の中に育て、

自分自身の魂が回復し、いやされることから始まります。キリストの赤子はまず、ほかの人に仕える前に、仕えてもらわなければなりません。イエス様の愛をはっきりと口にできるようになる前に、その愛に定められなければならず、また、人に安息を与えられるようになる前に、まず自ら、その安息の方法を学ばなければならないのです。

*多くの方々が、ご自分の救いの「瞬間」について覚えていらっしやらないようですが、それでいいのです。イエス様は、「わたしを信じる者は永遠の命を持っている」と言われています。ですから、救い主を信じているのなら、ご自分の救いのその瞬間を覚えていよといまいと、あなたは救われているのです。

第3章 キリストと共に生きて得る最初の実 あなたの魂の回復と育成

本章の題名からも分かるように、この章全体の内容は、イエス様と共に生きることの最初の実は、あなたの魂の回復と育成であることであると要約できます。そこで、一つお尋ねします。愛を経験したことも、見たこともない人が、人を愛することができるのでしょうか？簡単に答えますと、そのような人に、人を愛することはできないでしょう。また、自分の人生で喜びを経験したことの無い人が、イエス様を知る喜びを、人に伝えることができるのでしょうか？安息もなく、イエス・キリストの力と共に生きたことの無い人が、安息とイエス様の力を、人に教えることができるのでしょうか？どれも、答えは明らかでしょう。わたしたちにも同じことが言えます。自分自身の魂が回復され、いやされるまで、人に回復や、いやしを与えることはできません。ですからイエス・キリストの新しい信者は、何よりもまず、安息、保証、喜び、愛、自由、力、そして義の中で、自分自身の魂の回復を経験しなければならないのです。つまり、働けるようになる前に、よく休み、食べ、体力をつけ、健康に成長しなければならないのです。この世の赤子にと同じように、イエス・キリストにある赤子にも、要求されることなどはありません。ただあるのは、ゆったりとその幼児期を楽しみ、イエス・キリストの救いについてのよい教育を受け、健康に、強く、賢く育つことへの期待だけなのです。そのよう幼児期を過ごせば、よく準備され、これから一緒に歩もうする信者たちを、その言葉と行いの

両面から導くことができるようになるでしょう。

だれもが主への実を結ばせることを望みます。しかし、種子から実が実るまでに、まず木やほかの植物に育たなければならないように、わたしたちも成長することなしには、実を実らせることはできないのです。種子が十分な太陽と水、そして大地からの栄養を必要とするように、わたしたち信者はもまた、救い主イエス・キリストからの太陽、水、そして栄養が必要なのです。イエス様は、「わたしのうちにとどまりなさい。わたしもあなた方のうちにとどまっている。枝がブドウの木のうちにとどまっていなければ、自分では実を生み出すことができないように、あなた方もわたしのうちにとどまっていなければ、実を生み出すことはできない。わたしはブドウの木であり、あなた方はその枝だ。わたしのうちにとどまり、わたしもそのうちにとどまる者は、たくさんの実を生み出す。あなた方は、わたしを離れては何もできないからだ」（ヨハネによる福音書第 15 章 4 節から 5 節）と言われました。わたしたちは、イエス様を通して生き、呼吸し、存在しています。わたしたちがわたしたちであるようにし、わたしたちの中に実がなるように働いてくださるのは、イエス様なのです。つまり、どれほどの誠実を尽くしていたとしても、実りは、わたしたちの努力や活動によるものではないのです。「ですがわたしは主のために働きたいのです」、そう思う人もいるでしょう。このような望みは、最初は当然で、立派なもののように見えます。しかし若い信者は、主に仕え、主のための働きをする前に、まず、主に聖なる務めを果たしていただくかねばならないのです（ヨハネによる福音書第 13 章 4 節から 8 節）。イエス様は、自

分に「とどまる」ことによって実ると言われたことに注してください。わたしはこの「とどまる」という言葉が好きです。なぜなら、わたしたちは主イエスと共にとどまらねばならないことを意味しているからです。あちこち飛び回って主を喜ばせる方法を探すのではなく、主の御許（おもと）に休み、主に働いていただくのです。「あなた方は、わたしを離れては何もできないからだ」と言われました。主はわたしたちを通して働かれますが、わたしたちを通して働かれる前に、わたしたちを回復なさる必要があるのです。第1章でも見てきたように、人が救い主イエスを信じる時、その人は事実、罪から解放され、完全な者とされました。その全生涯が、栄光に満ちた状態から、良きものからの栄光の状態へと移り変わるものとなります。この良ききものとは、その人自身の魂の回復から始まるのです。このようにして、枝であるわたしたちは、イエスの善を分かち、わたしたちが主と共にとどまるとき、善から善に変わっていくのです。別の言い方をしますと、わたしたちは主の善を分かちとき、主の姿に変わったのです。主は善です。ですからわたしたちも善なのです(ヨハネの第一の手紙第4章17節)。そして、イエス様が生きられるように、わたしたちも生きるのです。もう一度言いますが、わたしたちは、主の似姿に変えられたのです。

もし、上記のことに疑いをもたれる方がいれば、次のことを考えてみてください。世界の救い主への召命を受ける前、イエス様はどのように生きていたでしょうか？ イエス様はその生涯の最初の30年を、普通の仕事をする、普通の人間として過ごされました。その事実注目していただきたいのです。イエス様は、3年半の福

音伝道に入り、病める者をいやし、世界を罪の中に死ぬことから救う前に、30 年を神の善を学ぶことに費やしました。つまり、イエス様は神の子として、神聖で完全な者として生まれたにもかかわらず、30 年を父なる神の恩寵、知恵そして強さを育てることに費やされたのです。わたしたちも同じです。イエス様のために働きをもつ前に、主から学び、そして主の安息を受けなければならないのです。「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。わたしは柔和で心のへりくだった者だからだ。そうすれば、あなた方は自分の魂に安らぎを見いだすだろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからだ。」(マタイによる福音書第 11 章 28 節から 30 節)わたしの好きな、テモテへの第二の手紙第 2 章 6 節でパウロが語った言葉は、次の通りです。「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである。」つまり、実らせたその実からもたらさせる善を最初に受けるのは、そのために働いた人であり、そのあと、ほかの人へも分け与えるべきなのです。パウロはガラテヤ人への手紙第 5 章 22 節から 23 節のなかで、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であると言っています。自分の命の中に、まずこの実を経験することによって、わたしたちはそれをほかに及ぼすことができるのです。

ここから本章では、イエス・キリストへの信仰によって得られる初穂、最初の実に重点を置きたいと思います。イエス様を信じることによって得られる実のすべては、イエス・キリストと福音という、すべて一つの源からもたらされるものと関連し、つながり合っています。ですから、繰り返しの説明ばかりになっても、問題は

なく、むしろその必要性があると思っています。これからわたしが
お話する最初の実とは、つまり、安息と学びの実であり、また福音
の中に定まり、イエス様の愛、善、喜びを自分で経験する実です。
それに加え、クリスチャンとして生きることの目的を悟るという実
についても、お話したいと思います。

その話へ移る前に、一点、とても大切なことを明確にさせてく
ださい。この点をはっきりとさせるには、最大の注意と、完全な理
解が必要となります。それは、すでに述べたように、すべての実は
イエスとその福音という、ただ一つの源からもたらされているとい
う真実です。この真実を実感することによって、わたしたちの目は
開かれ、何と、この実自体に重点を置くはないことが見えてくるの
です。わたしたちはむしろ、その実がどこから生まれたのかに注意
を向けるべきなのです。わたしたちの目がイエス様の上に注がれる
とき、イエス様の善と、その救いの実は、わたしの心から自然と自
由に流れ出すのです。イエス・キリストへの信仰のほかに、何もい
らないのです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信
じる者は永遠の命を持っている。」イエス様への信仰は非常に実用
的なものです。そうです、信心とは人生においてとても実用的なも
のなのです！ですから、わたしたちにはほかに必要なものなどあり
ません。この実とは、信仰の結果によってのみ生まれるものなので
す。ですから、この実自体についての説明は、純粋に学術的な討論
にすぎないのです。つまり、実とは、救い主への信仰からくる、自
然の結果となります。決して、自らの実を实らせようと試みるべき
ではありません。イエス様はこう言われました。「わたしなしでは、

あなたはなにごともなしえない」と。ですから、「イエス様を信じる」ことが豊かな実であると、いつも心に刻んでおいてください。イエス様はわたしたちのたちの中で、イエス様の欲する実を实らせるように、働きかけてくださいます。イエス様は、ご自身の肉体への栄光の目的を達成させるという御心によって、わたしたちを作り変え、形作られるのです。このように、肉体が多く部位からなるように、わたしたちも多くの部位からなるのです。イエス様を信じる人々は、多種多様の姿、生活をしています。ですが、共通点が一つだけあります。それは、イエス様を信じ、イエス様ご自身とその肉体、つまり教会を愛しているという点です。要するに、わたしたちは全神経をイエス様へと集中させなければならないのです。この点を考慮しますと、信仰からの実について書くことが、だれかをつまづかせる原因となる危険性があることに気がつきます(わたしが案じているのは、イエス様から焦点をそらせ、信仰からの実へと向けられることなのです)。しかし、確固たる励まし、助言、一般的なクリスチャン生活はどのようなものであるのかという教えを、信者に伝えるために、イエス様の救いからの実について、詳細をご説明することは正しく、重要性があると思うのです。ですから、本書の残りを通し、キリストと共に生きるわたしたちの人生を、引き続き扱っていきたいと思います。

まず、安息について、少しお話したいと思います。安息とは、イエス様を信じる人に課せられた仕事、もしくは割り当てられた仕事の義務がないことを意味します。これは、もし指を動かしたくないと思えば、それさえもしなくていいという意味なのです。そして

また、教会活動やプログラムなどにかかわらねばならない義務などないことも意味します。このような安息の特権により、信者には自分のしたいことができるという自由が与えられます。このイエス様における自分たちの権利を理解することは、疲れ、重荷を負った人々にとって大きな救いです。それはまた、霊魂のもっとも優れた贈り物、つまり愛への大きな勇気づけともなります。律法や義務のあるところには愛はありません。なぜなら、律法や義務のあるところには恐怖があるからです(ローマ人への手紙第4章15節およびヨハネの第一の手紙第4章18節)。

さて、このわたしがご説明してきた安息の概念について、感情を害する方がいらっしゃることでしょう。その方々に対して、わたしの回答はとてもシンプルです。聖書がそう教えている、ただそれだけなのです。イエス様の信者たちは、仕事を与えられなくても救われます(ヨハネによる福音書第6章47節、ローマ人への手紙第3章28節、お第4章5節から6節)。これが神の恩寵なのです(ローマ人への手紙第4章4節)。お伝えしたいことを、より明確にするために指摘しておきたいのは、わたしたちにあるのは怠けの義務ではなく、安息への自由だということです。安息への自由とは、生涯何もせずに過ごすという意味ではありません。その逆に、イエス様を信じる人、主の安息に加わる人はすべて、父なる神のうえに豊かな実を实らせることになります。信じる者から出る実とは、ごく自然と結ばれるものなのです。それはその心の中の善意から実を結ぶものであり、鞭打たれるのではという恐れや、褒美を得たいという熱意から来るものではありません。

この魂の安息を体験することによって、わたしたちの体、心、そして精神がいやされるのです。さらに安息は、わたしたちに静けさを回復させ、なにごとにも心を煩わされることなく、救い主イエスに全神経を向ける機会を与えてくれます。たとえば、イエス様が教師だったとしたらどうでしょう。受け入れられること、またその御前に義とされることが、わたしたちの望みのすべてとなってしまう、その結果、わたしたちは主に敬愛の念を向けられなくなってしまうでしょう。なぜなら、受け入れられることや見返りを得るためだけに、主のために働くことになるからです。このような場合、わたしたちは安息できず、また主の無償の恩寵と愛を受けられなくなってしまうでしょう。しかし、わたしたちが、一寸の陰りもなく主を救い主として見るとき、無償の安息へと導かれるのです。そしてその無償の安息の中で、福音としてわたしたちの前に示された主の救いの、全きありさまを受け取り、経験しながら、恐れも邪魔されることもなく、崇拜と賞賛に身を献げるのです。

そういうわけで、次に、最初の実、学びとイエス・キリストの福音の学びと、そこに自分を定めることについて、移りたいと思います。福音を学び、そこに定まるとは、わたしたちが全生涯をかけて成長させていく点なのですが、同時に、福音について、一つの基本的な知識が必要になります。それがあればわたしたちは、「だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく」なるのです(エペソ人への手紙第4章14節)。また福音を学び、そのなかに自分を定めることは、わたしたちにとって非常に望ましいことでもありま

す。なぜなら、福音は、わたしたちの救いへの知らせであり、その中で、豊かな継承物を見つけることになるからです。ヨハネによる福音書第 6 章 47 節で見たように、この救いとは、わたしたちが来世に楽しむものではありません。この世においても实际的、実用的に、そして楽しみに満ちたものなのです。ローマ人への手紙第 1 章 16 節のなかにも書かれているように「[キリストの福音] はすべて信じる者に、救を得させる神の力である」からなのです。こうしてイエス様の福音は、あなた自身とあなたのすべての敵の罪を解放してくれます。ですから、あなたはその生涯を通じて恐れることなく、聖と義の中に神に奉仕することができるのです(ルカによる福音書第 1 章 74 節から 75 節)。イエス様はわたしたちが命を、豊かに持つことができるように、わたしたちのもとにきてくださったのです(ヨハネによる福音書第 10 章 10 節)。福音を通してわたしたちに語りかけられる言葉を信じることによって、その主の豊かな命の力が見い出されます。したがって、イエス・キリストの福音を学び、そのなかに自分を定めることは、イエス様の信者にとって、最優先されなければならないことなのです。この点を、わたしは最初にお伝えしませんでした。それは、今、残念な傾向があるからです。つまり、キリストによって生まれた赤子が、その信仰を口に出した瞬間から、教会活動や儀式に追われるといった傾向です。まずは福音を学び、そのなかに定まらなければならないのです。しかし残念なことに、多くの場合、ほかのことをしたり学んだりするのに忙しくなり、時間がないのです。福音を学ぶ必要性や、そこにある恩恵にさえも気づくことができない人もいます。安息という実につい

て先に触れたのは、このような理由からなのです。

第1章の後半で、イエスを信じることの主な恩恵について、詳しくご説明しました(7-17 ページ)。イエス様の救いは、約束という形でわたしたちに示されました。そして、十字架において自らの血で、その約束に封印をされたのです。「本当にはっきりとあなたの方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。先の述べた恩恵とは、平安、愛、神へ完全な信頼を置けるということ、イエス様との友情という関係性、そして、神の子の持つ力、完璧さ、自由を経験することでした。わたしたちに与えられた福音の偉大さによって、心と魂を新たにするのに、もう一度、その箇所を読まれてみるのもよいかと思えます。このような真実は、クリスチャンとしての教育にとって、非常に重要な要素です。イエス様によって解き放たれた真実と、その豊かさを学ぶことは、わたしたちに喜び、愛、義、および力に満ちた人生の力を与えてくれることでしょう(ヨハネによる福音書第8章32節)。

福音を学び、そこに自らを定めることに深く関連している、もう一つの初穂、最初の実とは、イエス様の愛と善、そして喜びを経験することです。これが魂の回復と繁栄にどれだけ大切なことであるかは、ご説明するまでもないでしょう！イエス様がわたしたちに向けられた愛を学び経験するほどに、わたしたちの命はすばらしく豊かなものとなるのです。同情、慈愛、善で、さらに満たされるようになるのです。イエス様の愛を経て、わたしたちの心にも愛が花を咲かせ、わたしたちはほかの人々にとって、すばらしい慰めとなるのです。

わたしはイエス様を信じる人の中にも、イエス様の愛を実際には知らない人もいるということを、あえて言いたいと思います。厳格で要求の高い主人であり、地獄という威嚇を口にし、永遠の命はその規則を守る選ばれた者にのみ与えられる、イエス様をそのような方と考えているようです。そのように考えている人に、イエス様について尋ねたことがあります。すると、その人の考えているイエス様とは、人類をその心の善によって救った救い主イエスではありませんでした。その人のイエス様とは、よい弟子とみなされた人だけが救われる、半分だけの救い主イエスなのです。ですから、このような人は、信仰から信仰にではなく、良心の呵責から別の呵責に生きているのです(罪の告白と呵責は決して終わることがありませんから)。そして、また、栄光から栄光にではなく、恐怖から恐怖に生きているのです。イエス様をこのような方だと考えているのなら、あなたは神の愛を経験していないことになります。確かに、わたしたちの神は炎を燃やし、その名と報復は何にもまして恐るべきことです。ですが、神はその愛と恩寵によって、この世を裁くためではなく、救うためにイエス様をこの世に送ってくださったのも、また真実なのです。はっきり言いましょう。もし救われ、永遠の命を経験したいのであれば、あなたは救い主イエスを信じなければなりません。イエス・キリストは神の愛の表現であり、わたしたちはこの愛を受け取らねばならないのです。わたしたちはヨハネの第一の手紙第3章16節の中にこう書かれているのを知っています。「これによって、わたしたちは愛を知っています。彼がわたしたちのために自分の命を捨ててくださったからです」。同じく、ヨハネ

の第一の手紙第4章8節から10節にはこうあります。「…神は愛だからです。神の愛はこれによってわたしたちの内に示されました。すなわち、神はそのひとり子を世に遣わして、わたしたちが彼を通して生きるようにしてくださったことです。愛は、わたしたちが神を愛したことにあるのではなく、その方がわたしたちを愛し、ご自分のみ子をわたしたちの罪のための贖《あがな》いの犠牲として遣わしてくださったことにあるのです」と。さらにヨハネによる福音書の第3章16節、「神はそのひとり子を賜ったほどにこの世を愛してくださった。それは御子を信ずるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得るためなのです」はなじみ深い、すばらしい聖句です。先にも述べたように、これはわたしたちが受け取り、信じるべきメッセージです。わたしたちは、わたしたちの魂へ向けられた神の愛をよく知らなければなりません。ヨハネの福音書第4章16節には、「わたしたちは、神がわたしたちのために抱いておられる愛を知っており、信じています」とあります。これが、イエス様の愛と善を受け入れることは、主を信じることの最初の実だと言った理由なのです。主は愛の神であり、わたしたちに対するその考えは一方向的な裁きではなく、同情心、恩寵、慈悲、善に富んだものなのです。そして、善と慈悲は、生涯、毎日もたらされるものであること、わたしたちを真の後悔に導くのも、主の善であることだと学ぶ必要があります(ローマ人への手紙第2章4節)。これは主なる神からわたしたちが受け継いだ、嗣業の一つなのです。もし、神がわたしたちに抱かれる愛を信じないのであれば、つねに恐れと奴隷の境遇のなか生きることになるでしょう。ですが神のわたしたちに対する愛を

知り、信じるのなら、わたしたちは解放され、完全な愛がすべての恐れを除いてくれます。神のイエス・キリストに対する愛を知ることによって、わたしたちはいかに愛するか、完全な愛を実につけるかを学べるのです(ヨハネの第一の手紙第4章18節)。若い信者が何かしてみようと試みる前に、まず、自分たちに対するイエスの愛の真実の中に定められなければなりません。そして、この真実の中に定められて初めて、毎日がすばらしく輝かしい、最高のものとなるのです。毎日が善と喜びにあふれるでしょう。たとえこの世の労働や痛み、困難がどのようなものであれ、魂にはすべて安し、なのです。しっかりと、平安の中に根を下ろし、定まっているのです。その心の歌は、「イエス様、わたしの愛。あなたはわたしの最大の思い、あなたを考えるたびに毎日は喜びにあふれます。あなたの愛にとどまるとは、なんとすばらしいことでしょう!」

イエス様の喜びは、その愛につながっていると信じています。主の愛を信じる時、わたしたちは溢れんばかりの喜び、賛美、そして感謝の思いに包まれ、どうしようもなくなるほどなのです。この世に生きるわたしたちにとって、イエス様の喜びと救いの中にとどまること、それは、何事にも代えられない、とても重要なことなのです。この世は邪悪なところです。聖書は、わたしたち信者はここに生きている間、闇の力に抗して戦わねばならないと教えています(ガラテヤ人への手紙第1章4節、エペソ人への手紙第6章12節)。このように、わたしたちの魂を狙う多くの力が、イエス様にあるわたしたちの喜びと相続物を奪い去ろうとしています。しかし、イエス様はわたしたちに、永遠の命を授けました。敵がだれであろうと、

そのすべてに打ち勝つ力を確かに持っています。ですから、わたしたちを愛してくださる主を通し、自分はどんな支配者よりも勝るのだと、そう完全に信じ続けなければならないのです（ローマ人への手紙第8章37節）。イエス様の喜びにとどまる、よい方法があります。それは、その喜びに続く栄光を、いつも胸に抱き続けられたいのです。わたしは個人的に、イエス様と天の御国にある栄光を思い、空想するのが好きです。そして、イエス様や、すでに栄光の中へと旅立っていった人々が、今、何をしているのだろうか、考えたりもします。主に賛美を献げ歌い、神の中で喜びに浸っている、そうに違いありません！そして、わたしもすぐにそこへ向かい、ほかの信者と共に過ごすことになる事実、それを考えるのが好きなのです。栄光の中で聖人たちが集い、主と顔と顔を合わせる、そのような空想に身をおくことを、こよなく愛しているのです。つまり、いつか消えてなくなるこの世のことではなく、やがて来ることへと思いを馳せるのは良いことなのです。この世にある問題は、実際に起こっていることであり、煩わしいことは否めません。ですが、そのような問題に翻弄されてはいけません。パウロは、「それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ…だから、わたしたちは落胆しない。たとえわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」（コリント人への

第一の手紙第4章14節から18節)と言っているのです。

キリストにあっての兄弟から聞いた話を、お話ししたいと思います。自分が親しくしていたクリスチャンの友人がなくなり、そのお葬式に参列したときの話です。そのお葬式の時、参列していたすべての信者は、主の善をたたえ、祝っていたのです。ですが、参列者の中に、クリスチャンの葬式に不慣れの人がいました。その人は、親しい友人の葬式場で、人々の喜びに満ちた顔を見て、大変驚きました。そして、その兄弟に、なぜ参列者が喜んでいるのかと説明を求めました。その人には、喜びの理由が分からなかったのです。兄弟は、もちろん彼の死を喜んでいるわけではないが、みなイエスの喜びに満たされ、いつかその友人と天の御国で、イエスの御前で、そしてほかの信者たちとまた一緒になることができると知っているからだと言ったのです。兄弟はまた、この世では幸福でないこともある、しかし、イエス様と共にある喜びは、すべてを超越するという点も説明しました。わたしたちは永久であるものも、つかの間であるものも、それがどのように悪いことであっても、イエス様と共にある喜び、そして、イエス様にある力を失わせることはできないのです。そうです！わたしたちにはイエス様がおられ、主の中に生きているのです！すべてに打ち勝つのです！この喜びを、いつでも持ち続けようではありませんか！

最後にクリスチャンとしてのわたしたちの人生の目的を知るといふ、最初の実についてお話ししたいと思います。この人生への目的を知ることの重要性を、軽視してはいけません。クリスチャンとして生きる目的、それが往々にして誤解されているという理由だ

けでも、軽視してはならないのです。ヨハネの第一の手紙第 3 章 23 節では、次のように語られています。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおり、互いに愛し合うべきことです」この箇所が、クリスチャン生活の要約であると言えます。とても簡潔なものです。これが子供たちだけに向けられたメッセージであり、その子供たちだけが受け取れるものなのです。ハレルヤ！わたしたちはイエス・キリストを信じ、お互いに愛し合えばいいのです。ただそれだけなのです！

第 2 章でもご説明したように、わたしたちは、イエス様を信じた瞬間に持っていた簡潔な信仰を持ち続けなければならないのです。パウロは「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたように、彼にあって歩きなさい」のようにいったのは、そういう意味なのです。ヨハネもまた、その第一の手紙の最後に、イエス・キリストの信者に対してなぜこの手紙を書いたかを説明しています。「わたしがこれらの事を、神のみ子の名を信じているあなた方に書き送ったのは、自分たちが永遠の命を持っていることをあなた方が知るようになるため、また、神のみ子の名を信じ続けるようになるためです」（ヨハネの第一の手紙第 5 章 13 節）。ヨハネはここで、イエス様を信じる者は永遠の命を持ち、そしてイエスを信じ続けるべきだと、明らかにしています。ですから、ただイエス様を救いのために信じて、そこからさらに進んで、救い主であるイエス様より他のものを中心し始めるということをしてはいけません。イエス様への信仰を超えるものなどありません。わたしたちは、主において生き、

息をし、存在を委ねているのです。わたしたちは主とその言葉に従い、主はわたしたちの内におられ、わたしたちをすばらしい信者の体とするために働かれていますと信じましょう。

次にイエスを信じる者として、わたしたちはお互いを愛し合わなければなりません。前にも示したように、これはわたしたちの努力にかかわらず、イエス・キリストの福音の恩寵と知識を増してゆくとき、靈魂の働きを通して自然に身につくものなのです。つまり、イエス様を信じる者はすべて、自然に愛という実を持つようになるのです。主はぶどうの木、わたしたちはその枝なのです。主はわたしたちを通し、このもっとも美しく、貴重な実が実るよう、働きかけているのです。愛は聖霊からの一番大きな贈り物です。愛は律法を実現させるものです(ローマ人への手紙第 13 章 10 節)。そして、それだけでなく、イエス・キリストが問題視されるのは、愛によって働く信仰のみである、とも書かれています(ガラテヤ人への手紙第 5 章 6 節)。

わたしたちが生きている今の世の中では、多くの人々が、クリスチャン生活の目的は、まだ救われていない人々に福音を伝えることに尽きるのだとあなたに信じさせようとしています。ですがこれは間違いです。宣教活動、伝道主義、そして迷える人々に福音を説くことの重要さは疑いのないものではありません。しかし、それはわたしたちの人生の目的ではありません。迷いの中にいる人々に福音を説くことは、イエス・キリストへの信仰から来る、多くの実の一つに過ぎないのです。事実、もしわたしたちがイエス様を信じて互いを愛していれば、まだ救われていない世の中は、イエス様につい

で知るようになるでしょう。イエス様はこの同じことを次の言葉で表しておられます。「あなた方が互いに対して愛を抱けば、これによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子だということを知らるだろう」(ヨハネによる福音書第 13 章 35 節)。天なる父への祈りの中で、次のような、同じような結論に至っています。「彼らがみな一つになるためです。ちょうど、父よ、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるのと同じようにです。それは、彼らもわたしたちのうちで一つになるためであり、あなたがわたしを遣わされたことを世が信じるためです」(ヨハネによる福音書第 17 章 21 節)と。神の御心は、わたしたち信者が互いを愛することにあります。信者が仲間の信者を愛するのです。ただそれだけです。遠大すぎるものはなにもありません。つらすぎるともないのです(ヨハネの第一の手紙第 5 章 3 節)。わたしたち信者が互いを愛するならば、わたしたちは真に一体の完全なものとなり、不信心者もやがて、天なる父がイエス様をこの世に遣わされたことを知るようになるでしょう(ヨハネによる福音書第 17 章 23 節)。

これまでのすべての結論は、「御子であるイエス・キリストの御名によって信じ、イエス様が命じられたように、互いに愛すること」となります。しかし、この言いつけを守り始める前に、実はこれこそが、わたしたちクリスチャンとしての人生の目的であることを、完全に理解しなければなりません。クリスチャン生活を複雑にしてしまうような誘惑はすべて捨ててしましましょう。クリスチャンとして、わたしたちが生きていくためにある神の目的とは、簡素で偉大なものです。その目的は、決して、方法、システム、活動な

どとすり替えられてはならないのです。もしイエス様を信じるのであれば、ほかのすべてのこと、そして、すべての大きなものは、自然と生まれ出てくるでしょう。これを信じなければなりません。

本章では、イエス様への信仰によってもたらされる最初の実について見てきました。クリスチャン生活の最初の実、それは自分自身の魂の回復と養育なのです。子供がいずれは大人に育てゆくように、キリストの赤子もそうなるのです(ヨハネの第一の手紙第 2 章 12 節から 14 節)。ですがもしキリストの赤子が食物を与えられず、適切な育児がなされなければ、その成長を望むことはできません。わたしはこの章が、若い人々に慰めをもたらし、定まることへの助けとなることを祈ります。この章全体と前章は、ある意味、クリスチャン生活への導入部分だといえるでしょう。では、次の二つの章では、クリスチャン生活について、さらに詳しく見ていきます。第 4 章では、クリスチャン生活について、さらに個々の信者という視点から見ていきます。先に引用したヨハネの第一の手紙第 3 章 23 節にもとづいて、ご説明して行きたいと思っています。第 5 章では、本書の結びとして、神がイエス・キリストの体、つまり教会全体に持つ、壮大な目的についてご説明したいと思っています。

第4章：愛によって働くイエス様への信仰

前章で、クリスチャンの生き方は、ヨハネの第一の手紙第3章23節の一文に要約されるということを見てきました。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです」。このことを悟るとき、肩の重荷が落ちていくような感覚を味わいます。神の掟は耐え難いものではなく、担うのに軽く、そして良きものと安らぎに満ちているのです（マタイによる福音書第11章28節から30節、ヨハネの第一の手紙第5章3節）。イエス・キリストの信者の方々がこれを知れば、救い主であるお方への実を結ぶ生き方がはっきりと見えてくるはずです。

すでに明確にしてきましたが、すべての愛の実は、イエス様がわたしたちの内に働かれるとき、イエス・キリストへの信仰により生まれ出ます。ガラテヤ人への手紙第5章6節に、「キリスト・イエスにあっては、割礼があってもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によって働く信仰だけである」とあります。新約聖書では、割礼を受けることは、モーセの律法の下に身が置かれている象徴だとされています。ですが、このガラテヤ人への手紙によると、使徒パウロは割礼を受けることは無意味だと言っているのです。「割礼があってもなくても、問題ではない」と。つまり、モーセの律法を守ろうとする努めは、何の益にもならないのです。同様に、割礼を受けなくても、何の益にもなりません。「割礼があってもなくても、問題ではない」のです。ですから、律法なしに自由に生きるシステ

ムを重視することも無意味なのです。では、これは一体どういうことなのでしょう？イエス・キリストにある真の価値とは、愛によって働くイエス様への信仰のみに認められます。クリスチャンの間で、律法、あるいは恵みのどちらかを重視する傾向をよく目にしてきました。ある人は、神の律法を守る必要を、また、ある人は、恵みにあって自由に満ちて生きる必要を重視しています。しかし使徒パウロは、ガラテヤ人への手紙で、どちらも問題ではないと言っているのです。神の律法をどれだけ守るかは問題ではありません。イエス様は、愛によって働く信仰のみに価値を見い出されます。同じように、どれだけ恵みの教えを定めようとも、愛によって働く信仰でなければ、それも無意味なのです。

主イエス・キリストにある愛だけが、クリスチャンにとって価値のあるものとなります。前章にも書きましたが、この悟りは、魂に大きな安らぎを与えます。わたしたちの人生に対する、主の御心は何であるのかと、悩み続ける必要がなくなったのです。主の思いはとても単純です。「わたしは新しいおきてをあなた方に与える。わたしがあなた方を愛したように、あなた方が互いを愛することだ。あなた方も互いに愛し合うためだ」（ヨハネによる福音書第13章34節）。そこで、この章では、愛によって働く信仰がイエス・キリストの枝であり多くの実を生み出す、ということを示したいと思います。愛によって働く信仰がクリスチャンの生き方なのです。

この章を進めるにあたり、神を喜ばせるもの、つまりイエス・キリストにある愛と、神を喜ばせないそのほかのすべて、この両者をはっきりと区別させたいと思います。いくつかの鍵となる聖句を

見ることで、愛が何よりも優れているということが、皆さまの目に明らかになるよう願っています。

新約聖書の中の、衝撃的な聖句が二つあります。これらの聖句から、宗教的な行い、熱心さ、その成果は、イエス様を喜ばせはしないとお分かりいただきたいのです。

まず、一つ目の聖句、マタイによる福音書第7章21節から23節を見てみましょう。ここでは、イエス様の恐れるべく言葉が見られます。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の王国に入るのではなく、天におられるわたしの父のご意志を行なう者が入るのだ。その日には、多くの者がわたしに向かって、『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名において預言し、あなたの名において悪霊たちを追い出し、あなたの名において多くの強力な業を行なったではありませんか』と言うだろう。その時、わたしは彼らに告げる、『わたしは少しもあなた方を知らない。不法を働く者たちよ、わたしから離れ去れ』と。」これは、とても恐ろしい箇所です。イエス様は「多く」のイエス・キリストの弟子のように生活していた人々が不法を働く者だとされ、離れ去れと言われているのです。これはどういうことでしょうか？ここに出てくる人々はみな、完璧な弟子と見える人ばかりです。彼らは、予言をし、悪霊を追い出し、主の名による多くの素晴らしい業を行ったのです。このような人々を、クリスチャンではないとだれが言えるのでしょうか。彼らの言葉、行いは、人の目には、主の偉大なしもべとして映ったのです。これらの人々は、おそらくリーダー的な存在として高い地位にいたことでしょう。多くの人の指導者であり、彼らを見聞きする人に尊

敬されていたはずですが。しかし、主イエス・キリストは彼らをよく知りませんでした。主イエス・キリストにとっては、ただの不法を働く者にすぎなかったのです。

次に、二つ目の聖句は、マタイによる福音書第5章20節です。イエス様は弟子たちに向かってこう語っておられます。「あなた方に告げるが、あなた方の義が律法学者たちやファリサイ人たちのものにまさっていなければ、あなた方は決して天の王国に入ることはないからだ。」(マタイによる福音書第5章20節) 律法学者や、ファリサイ派の人たちは、大変な宗教家で、神の律法を守るのに熱心でした。良き行い、神の知識、伝道活動、そのほか多くの宗教的な儀式に熱心に従っていました。自分たちの目に真実であることを追い求め、義人として生きる最善の努力をしていました。彼らは自分たちの目に、また、多くの一般大衆の目に、神の完璧なしもべと見えたでしょう。しかし、イエス様は、彼らを偽善者だと言明し、わたしたちの義が、彼らの義にまさっていなければ、天の王国に入ることはないと忠告したのです。

では、イエス様は、何を求められているのでしょうか？ 予言、悪霊を追い出すこと、良き業、神への献げもの、祈り、聖書の勉強、律法を守ること、そして伝道活動。これらのすべてがイエス様の願いでないとするれば、わたしたちは、ほかに何ができるのでしょうか？ この聖句に出てくる人々は、「霊的」であるということに関しては、エリート中のエリートなのです。その彼らの実が主に受け入れられないのであれば、どのような実であれば、受け入れられるのでしょうか？ この質問への答えは、すでにお分かりだと

思いますので、質問する必要はないと思います。繰り返しは、重要な内容を覚えるため、そして何が重要かを見極めるのに良い方法なので、もう一度、質問しましょう。一体、主のわたしたちへの御心は何なのでしょう？「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです。」(ヨハネの第一の手紙第3章23節)つまり、イエス・キリストは、あなたが偉大なクリスチャンとなることなどには、関心はないのです。夢や、ゴール、ビジョンに成功するか、失敗するかは、イエス様の関心事ではありません。イエス・キリストにとって唯一の関心事、それは、あなたの心です。イエス・キリストを信じるすべての者が救われ、互いに愛し合う中で実を結んでほしい、そう願われているのです。イエス様は、クリスチャンが、身近にいる人たちを中心に愛することを願われています。つまり、教会で同じ座席に座っている人です。そうです、イエス様は、貧しい人々に食べ物を与えたり、まだ救われていない人々に福音を伝えるよりも、わたしたちが教会で隣に座っている人を愛し、また、愛されてほしいと願っておられるのです。個人的にわたしは、このことを悟ったときに、ショックを感じました。ですが、これはこの世で最も明確にされるべきメッセージなのです。新約聖書に、イエス・キリストのしもべは互いに愛し合い、心を配り合い、そして助け合うようにと繰り返し書かれているからです(ルカによる福音書第22章24節から26節、ヨハネによる福音書第13章13節から17節、34節から35節)。

ここで、イエス様のたとえ話で、最もよく知られているものの

一つを見てみましょう。マタイによる福音書第 25 章 31 節から 46 章です。このたとえ話は、イエス・キリストの思いをととても明確に映し出していると思います。信者にとって麗しいことは、イエス様がわたしたちの心の内に住まわれ、このたとえ話の登場人物である良き人の実を結んでくださるということです。

マタイによる福音書第 25 章 31 節から 46 節は、長い聖書箇所ですが、皆さまに読んでいただけるよう、ここに引用いたします。このたとえ話は、多くの人に知られていますので、さらっと読まれるかもしれませんが、それでもいいのですが、できれば 31 節から 32 節、37 節、40 節、44 節から 45 節は、特に注意深く読んでいただきたいと思います。

「31 さて、人の子が自分の栄光のうちに到来し、すべての聖なるみ使いたちが彼と共に到来するその時、彼は自分の栄光の座に着くだろう。32 すべての民族が彼の前に集められるだろう。そして彼は、羊飼いが羊をヤギからより分けるように、彼らを互いにより分け、33 羊を自分の右に、ヤギを自分の左に置くだろう。34 その時、王は自分の右にいる者たちにこう告げるだろう。『さあ、わたしの父に祝福された者たち、世の基礎が据えられて以来あなた方のために備えられていた王国を受け継ぎなさい。35 わたしが飢えると食べ物を与え、わたしが渇くと飲み物を与え、よそから来ると宿を貸し、36 裸でいると服を着せ、病気でいると見舞い、ろうやにいと来てくれたからだ』。37 「その時、義人たちは彼に答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられるのを見て食物を差し上げたり、渇いておられるのを見て飲み物

を差し上げましたか。 38 いつわたしたちは、あなたがよそから来られたのを見て宿を貸し、裸でおられるのを見て服をお着せしましたか。 39 いつわたしたちは、あなたが病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、あなたのところに参りましたか。 40 「王は彼らにこう答えるだろう。『本当にはっきりとあなた方に告げる。これらわたしの最も小さい兄弟たちの一人にあなた方がしたことは、わたしにしたのだ』。 41 それから、王はまた自分の左にいる者たちにこう言うだろう。『のろわれた者たちよ、わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために備えられた永遠の火に入りなさい。 42 わたしが飢えても食べ物を与えず、わたしが渴いても飲み物を与えず、 43 よそから来ても宿を貸さず、裸でいても服を着せず、病気でいたり、ろうやにいても見舞ってくれなかったからだ』。 44 「その時、彼らも答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられたり、渴いておられたり、よそから来られたり、裸でおられたり、病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、お世話をしませんでしたか』。 45 「その時、彼は彼らに答えてこう言うだろう。『本当にはっきりとあなた方に告げる。これらわたしの最も小さい兄弟たちの一人にあなた方がしなかったことは、わたしにしなかったのだ』。 46 これらの者は永遠の処罰に入り、義人たちは永遠の命に入るだろう」

もう一度お尋ねします。主の御心は何でしょう？多くの人は、何時間も思案し、主の御心を見極めるために長い時間を祈りに費やします。これをすべきだろうか、あれをすべきだろうか？右へ行くべきか、左へ行くべきか？もしかすると、主の御心はわたしがもつ

と祈ることかもしれない。聖書を多く読むことだろうか。聖歌隊や小グループへの参加だろうか。それとも、祈り、待ち、そして主より特別な油注ぎを受けることをかもしれない。献金を増やすことだろうか。もしくは、主の御心はわたしの献身かもしれない。伝道活動への参加だろうか。もっと人を愛することだろうか。このように思案します。ですが、驚くべき真実は、主の御心はこれらのどれでもないのです。では、主は一体どうお考えなのでしょう？主がこの世の王として、審判として戻られるときの主の基準は一体何なのでしょう（31 節から 32 節）？主は 40 節に、彼の御心は何か、はっきりと語られています。「王は彼らにこう答えるだろう。『本当にはっきりとあなた方に告げる。これらわたしの最も小さい兄弟たちの一人にあなた方がしたことは、わたしにしたのだ。』」イエス様の思いは、もっぱら最も小さい兄弟に向いているのです。イエス様の最も小さい兄弟とは、すなわち教会の中にいる弱さを覚える人たちのことです。イエス様のことを信じているけれども、力がなく、貧しく、途方に暮れ、着るものがなく、また、病気を患い、見捨てられている人たちを指しているのです（35 節から 36 節）。これらの聖句を注意深く読んでみてください。裁きの基準となるものは、ほかに何も書かれていないことにお気づきになることでしょう。イエス様はただ、わたしたちが最も小さい兄弟たちを愛しているかとお尋ねなのです。この見解の証拠に、もう一つ聖句を見てみたいと思います。ルカによる福音書第 9 章 46 節から 48 節では、こう語られています。「彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いかという論争が生じた。 イエスは彼らの心の思いに気づき、幼子連れ

れて来て、自分のわきに立たせて、彼らに言った、「わたしの名のゆえにこのような幼子の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのだ。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのだ。あなた方全員のうちで最も小さい者こそ偉いなのだ。」イエス様の目には、兄弟の中で最も小さい者を受け入れる人が、最も偉大なのです。

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」イエス様は、互いに愛し合うことを望まれています。イエス様の兄弟の中で、最も小さい者よりも愛と慈しみを必要としている人はいるでしょうか？使徒パウロが「美しい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」（コリント人への手紙一第 14 章 24 節から 27 節）と語るのは、まさにこのことなのです。イエス・キリストの体であるわたしたちは、互いに愛し合い、とくにその体の中で強い者は、弱い者に心を配らなくてはなりません（ローマ人への手紙第 15 章 1 節、ガラテヤ人への手紙第 6 章 2 節）。イエス様の思いは全面的に、クリスチャンがほかのクリスチャンを愛することにあります。わたしたちがイエス様にあって一つとなるのが彼の思いであります（ヨハネによる福音書第 17 章 21 節）。クリスチャ

ン同士が愛し合えないとすれば、明らかにほかのだれも愛することはできないのです。わたしたちに最も近い人を愛せないのであれば、遠くにいる人を愛することができるでしょうか？今、この場所にこれほどの痛みがあるとき、どのように世界伝道について考え始めることができるのでしょうか？まず、体がいやされますように、そうすれば、ほかのすべてのことは自然とついて来るでしょう。イエス様ご自身がヨハネの福音書第 17 章 9 節でこう語られています。「わたしは彼らのためにお願いします。わたしは世のためではなく、わたしに与えてくださった者たちのためにお願いします。彼らはあなたのもものだからです。」つまり、イエス様の願いは、彼ご自身の人々に向いているのです。イエス様は、信じない者よりも、信じる者に特別な思いをい দিয়েおられます。イエス様は、偉大な者より小さい者を、より特別に思っているのです。強いクリスチャンより、弱いクリスチャンのことをより特別だと言われます。クリスチャンの務めは、キリストの体の完成化なのです。もし、わたしたちの中に強い者があれば、弱い者に心を配らせましょう。

よく知られるもう一つの聖句で、イエス様はこう語られました。「わたしがあなた方を愛したとおりに、あなた方だれかがその友人たちのために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない。」

(ヨハネによる福音書第 15 章 12 節から 13 節) だれかのために自分の命を捨てるには、よほどの理由がなければなりません。つまり、生死の境となるような場合以外、他人のために命を捨てたりはしないものです。必要は、必要を覚えているクリスチャンに見るものです。そのようなクリスチャンが、今ここに存在します。教会の座席

に座っているかもしれません。または、家族の中にいるかもしれません。イエス様は、友のために命を捨てるようにとされます。友とは、見知らぬ人、会ったことのない人たちではなく、むしろ、身近にいる人のことなのです。私たちはこのことを本当に悟らなければなりません。救い主であるお方について、さらに深く知っていくとき、やっとこのことを悟ることができます。わたしたちの救い主は、個々に約束を下さっています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」（ヨハネによる福音書第6章47節）わたしたちのために命を捨ててくださったお方、そのお方についてさらに深く知っていくとき、自然とその愛に成長させていただくのです。友のためにすべてを投げ捨てることをいとわない愛に、自然と育っていくのです。これは、わたしたちが確信していることでもあります。なぜなら、イエス様が永遠の命をくださった時点で、そう約束してくださったのですから。

マタイの福音書第25章31節から46節のたとえ話が興味深い点は、この話に出てくる義人たちは、自分たちが義人であると気づいていない一般の人々であるということです。「その時、義人たちは彼に答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられるのを見て食物を差し上げたり、渴いておられるのを見て飲み物を差し上げましたか』いつわたしたちは、あなたがよそから来られたのを見て宿を貸し、裸でおられるのを見て服をお着せしましたか。いつわたしたちは、あなたが病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、あなたのところに参りましたか。』彼らの良き行いは、自然に生まれ出たものでありました。大きな計画や

夢を抱いたわけではありません。ただ正しいことを行ったのです。その行いとは、身近な人たちを愛したということです。もう一度言わせてください。強くあると思える方は、教会に座っている回りの方々を見回してください。必要を覚えている人を見つけるにちがひありません。弱い人、もしくは、苦しんでいる人を見つけることでしょう。もしかしたら、信仰について悩み、励ましを必要としている人がいるかもしれません。ただ友達を必要としている人、または、お金や助けを必要としている人がいるかもしれません（そして、更に深い真実とは、読者の皆さまの多くが、助けを必要としているかもしれないということでしょう。救い主、主イエス様が、慈しみに満ちた偉大な心でわたしたちをかえり見て下さり、助けを送ってくださりますように、心から祈っています）。

その一方、義人たちが自分の義に気づいていなかったように、不義である者たちも、自分たちの不義に気づいてはいませんでした。不義な者たちは、44節でイエス様にこう答えています。「その時、彼らも答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられたり、渴いておられたり、よそから来られたり、裸でおられたり、病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、お世話をしませんでしたか。』」つまり、彼らは、間違ったことをしているとはどうも思っていないませんでした。不義な者の共通点は、イエス様の最も小さな兄弟たちには何の関心も示さなかったことです。彼らがどれだけ素晴らしい生き方をしたか、何を達成したかは、重要ではありません。イエス様の基準は、明白ではっきりとしています。「あなたは、わたしのもっとも小さな兄弟たちに何をしてあ

げましたか？」

本章の終りにあたり、もう一度、神のクリスチャンへの目的が何かを見てみたいと思います。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおり、互いに愛し合うべきことです。」

(ヨハネの第一の手紙第3章23節) 神がわたしたちに願われるのは、これに限ります。そして、これがすべてに優るのです。そうです、神のわたしたち、教会へのこの願いは、ほかの目的、夢、ビジョンがどれだけ偉大で素晴らしくあろうと、そのどれにも優るのです。イエス様を信じましょう。そうすればあなたは完全となるのです。イエス様を信じれば、あなたは、愛の実を生みだします。神のイエス・キリストにあるわたしたちへの目的は、想像を遥かに超えて大きく、素晴らしいのです。多くの人々は、「ただ信じ、愛し合う」だけでは、ものたりなく、愚かであると思われるかもしれません。ですが、これがイエス様の思いなのです。より優れた方法、ビジョン、夢、ほかの多くのことを求める人々に囲まれています、イエス様の思いを妥協することのないようにしましょう。イエス様の福音は単純なのです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」(ヨハネによる福音書第6章47節) そして、彼の思いは単純です。「あなた方が互いに対して愛を抱けば、これによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子だということを知るだろう」(ヨハネによる福音書第13章35節) 前章で、クリスチャンの生き方は、ヨハネの第一の手紙第3章23節の一文にまとまるということを見てきました。「これがその方の

おきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです」。このことを悟るとき、肩の重荷が落ちていくような感覚を味わいます。神の掟は耐え難いものではなく、担うのに軽く、そして良きものと安らぎに満ちているのです（マタイによる福音書第 11 章 28 節から 30 節、ヨハネの第一の手紙第 5 章 3 節）。イエス・キリストを信じる方々がこのことを知れば、救い主であるお方への実を結ぶ生き方が、はっきりと見えてくるでしょう。

第5章：イエス様の栄光を見る

最終章では、イエス・キリストの体である教会全体への、神の壮大な目的を見ていきます。ヨハネによる福音書第17章20節から24節に、神のわたしたちへの目的が要約されています。この聖句箇所は、イエス様が父に祈っておられる場面です。「わたしは彼ら（使徒たち）のためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。父よ、あなたがわたしに賜った人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい。天地が造られる前からわたしを愛して下さい、わたしに賜った栄光を、彼らに見させて下さい。」これらの5節を通して、信仰する者によってなる体、つまり、教会に対するイエス様の御心を知ることができます。またこの箇所では、イエス・キリストの体であるわたしたちに対する、神の全体的な目的が伝えられています。前章では、個々の信者とい

う視点での神の目的を中心に見てきました。この章では、御子イエス・キリストを信じる共同体としての神の目的に注目していきたいと思えます。

特に、ヨハネによる福音書 17 節 20 章から 24 節にあるイエス様の祈りを顧慮して、イエス様が教会に対して望んでおられる 3 つのことをお話したいと思えます。まず一つ目は、わたしたちが、父とイエス様と一つになることを望まれているということです。一つになることによって、わたしたちは完璧なものとなり得ます。次に二つ目は、イエス様が望まれる世界伝道の方法をこの節から知ることができます。すなわち、わたしたちが一つになることによって、父なる神がイエス・キリストをこの世に送ってくださったのだと、世界が信じるようになるということです。最後に、イエス様の願いは、わたしたちが完全な体となり、イエス様のおられるところに、わたしたちもまたあってほしいと書かれています。わたしたちが、イエス様の永遠の栄光を見るためであります。

教会に対するイエス様の御心を学ぶことで、わたしたちが、イエス・キリストの教会として何を望むべきか見極めてほしいとイエス様は願われます。わたしたちは、イエス様の栄光を受け、大いに、完全に、父そして御子に愛されています。わたしたちの内に、イエス様と同じ心、望みがあるとは、何という栄光でしょう！

具体的に言いますと、わたしたちの第一の望みは、一体となることであり、父と子にあって完全な愛で互いにを愛し合うことであるべきなのです。そして第二の望みは、一体となったわたしたちが、この世の救い主として、父なる神がその御子を送ってくださったと

いう事実を、世界へ伝えられることとなるでしょう。そして最後の望みは、イエス様の永遠なる栄光を目の前で見ることができるよう、イエス様のおられる所にわたしたちも共にいることとなるのです。この章では、イエス・キリストの体である教会への、この3つの望みについて見ていきたいと思えます。

まず始めに、わたしたちの望みは、イエス・キリストと一体になることであるべきです。イエス様は、教会を家族にたとえられています。イエス様を信じる人は、神の子ども、兄弟と呼ばれています（ルカによる福音書第20章26節、ヘブライ人への手紙第2章12節、ガラテヤ人への手紙第3章26節）。イエス様は、わたしたち人間と家族になるために、人となられました（ヘブライ人への手紙第2章13節から14節）。イエス様の家族は、一緒にいて、すべてのものを共有にして、そして、弱き者をとても大事にしているという点です（使徒行伝第2章44節、使徒行伝第4章32節、コリント人への第一の手紙第12章18節から27節）。イエス様の家族では、権力のある者が弱き者で、弱き者が偉い者だとされています（ルカによる福音書第22章25節から27節）。イエス様の家族には、不一致、分裂といったものはありません。家族の一員は皆、イエス様のことをよく知り、イエス様がわたしたちの存在の真髄だと知っているからです（コリント人への第一の手紙第12章25節、ヨハネの第一の手紙第5章20節）。イエス様はわたしたちの内におられ、わたしたちもまたイエス様の内にいます（ヨハネの第一の手紙第4章15節から16節）。このように、これらすべてを心に留めたとき、イエス様と一つに結ばれたいという望みが自然と生まれ出てくる

はずなのです。

神は、イエス・キリストにあって、自分で決断をする自由と、神のくださった素晴らしい解放の中に生きる自由をお与えになりました。この自由があるからこそ、わたしたちは、互いに愛し合い、仕え合うことができるのです。前章で見たように、イエス・キリストにある完成を結びつける絆は愛なのです。ですから、イエス様を信じる者が、愛し合っていると思うのは当然のことなのです。わたしたちの互いへの愛が、わたしたちを一つとするのです。

ここで、わたしが前章でお話した内容と、今この章でお話している内容とを区別したいと思います。わたしたちの互いへの愛について話をする一方で、わたしたちの愛の大きさが、所属する教会だけでなく、イエス・キリストに属する教会全体へと広がったという点をご説明したいと思います。

イエス・キリストの教会には、イエス・キリストを救い主と信じるすべて人々が含まれています。わたしたちの共通点はイエス・キリストであって、この共通点はほかのどのような共通性にも勝るのです。国籍、人種、性別、家族、習慣、社会的地位、経済的地位、学歴、どのようなものでも、イエス様という共通点に勝ることはありません。それだけではなく、イエス・キリストという共通点は、宗派の分裂をもしのぐのです。少し考えてみましょう。もし、イエス様を信じるすべての人々が、永遠の命を得られると本当に信じているのなら、わたしたちの教会にある99.9%の意見の相違は、なくなるのではないのでしょうか。救い主イエスに満たされて、お互いへの愛があふれ出ることでしょう。わたしたちは、イエス様以外

の何かを知ることはなく、イエス様について以外、話すことはないのです。わたしたちの口には、絶えることなく賛美の歌があり、そして、救い主を知る人たちのだれとでも交わりたいと望むようになります。

わたしたちを一体へと導く愛について、一つ、具体的な例、相互関係のない教会同士が愛し合うことについてお話したいと思います（相互関係のない教会とは、危険な異端の教会や、聖書にもとづかない教会を指しているのではありません。主流の聖書に基づいた教会で、たとえば、異なる宗派にある義務、所属、または、少し違う信条のある教会のことを指しています）。わたしたちがイエス様を信じる者同士、お互いを兄弟、姉妹として、実際に見ているのであれば、新たな教会を建てて、拡大を重要視するよりも、すでに存在する教会への助けやいやしを重要視するのではないのでしょうか。なぜ、長年に渡って、定着した教会がすでにあるところに、ほかにも多くの教会が開拓され、教会戦略が使われているのか、不思議ではないか。神が何か新しいものを求めておられると思うのでしょうか？神が教会の成長のために、より良い方法を求められおられると思いますか？神が質よりも量を求めておられると思いますか？そうだとは思いません。教会が生き抜くために、競い合うことを神は喜んでおられません。また、教会の「成長」のために新しい方法を取り入れることを、神は喜んではおられないでしょう。イエス・キリストがただ唯一、成長への方法です。そして父なる神は、愛によって働くイエス・キリストへの信仰のみに関心を持たれるのです。海外で、すでに教会があるのに、新しい教会を定着させようと、数

多くの宣教師が働いていることに驚きを感じます。すでに存在する教会を助ける方が大切ではありませんか？同じイエス・キリストを信仰する教会なのですから、愛に駆られ、苦しんでいる教会を助けに行こうと思いませんか？これらの弱い教会こそが、最も小さいイエス様の兄弟たちが数多くいる場所ではないでしょうか？新しく何かを始めるよりも、病気に苦しみ、傷つき、死に直面している人たちを助け、いやす方がよほど名誉のあることなのです。考えてみてください。イエス・キリストは病気に苦しみ、傷つき、死に直面している人たちを救うために、この世に来られました。イエス様は人類を投げ出して、ゼロからのやり直しなどされませんでした。わたしたちもそうあるべきなのです。弱き者を潰すのではなく、いやしを選ばなければならないのです。

しかし、すでに教会があるところに、新しい教会を建てる必要があるときもあります。ヨハネの黙示録第2章、3章に書かれてあるように、イエス様は、教会があまりにも堕落しているため、死に至ることもあるとはっきりとおっしゃっています。しかし、教会を破壊することは決してイエス様の御心ではありません。イエス・キリストは、教会が死に至って消え去っていくよりも、教会が力を取り戻し、生きることを望まれています。イエス様は、苦しんでいる教会を投げ捨てて、大きく、より良い教会戦略が練りこまれた教会を新しく建てること望んではおられません。それよりも、苦しんでいる教会をいやすことに、わたしたちが働きかけることを望まれています。これらのことをさらに明確にするために、旧約聖書から、出エジプト記第32章7節から14節、出エジプト記第32章30

節から 35 節を見たいと思います。

「7 主はモーセに言われた、「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。8 彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鋳物の子牛を造り、これを拝み、これに犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である』と言っている」。9 主はまたモーセに言われた、「わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。それで、わたしをとめるな。10 わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」。11 モーセはその神、主をなだめて言った、「主よ、大いなる力と強き手をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか。12 どうしてエジプトびとに『彼は悪意をもって彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいのでしょうか。13 どうかあなたの激しい怒りをやめ、あなたの民に下そうとされるこの災を思い直し、あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこの地を皆あなたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであろう』と彼らに仰せられたことを覚えてください」。14 それで、主はその民に下すと言われた災について思い直された。～～ 30 あくる日、モーセは民に言った、「あなたがたは大いなる罪を犯した。それで今、わたしは主のもとに上って行く。

あなたがたの罪を償うことが、できるかも知れない」。31 モーセは主のもとに帰って、そして言った、「ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。32 もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば——。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」。33 主はモーセに言われた、「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。34 しかし、今あなたは行って、わたしがあなたに告げたところに民を導きなさい。見よ、わたしの使はあなたに先立って行くであろう。ただし刑罰の日に、わたしは彼らの罪を罰するであろう」。35 そして主は民を撃たれた。彼らが子牛を造ったからである。それはアロンが造ったのである。」

この話の中で、主は、民の罪に非常にお怒りになり、彼らを滅ぼそうとされました。主はモーセにこうおっしゃいました。「それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」と。このように、民を滅ぼし、新しく造り直すのが、神の御心だったのです。モーセは、主の声を聞きました。彼は、主の御心を聞いたのです。モーセは、主の啓示を受け、新しい大いなる国、そして、その国を導く者となる召命を受けました。だれが神の御心を避けることができるでしょうか？神の御心に背く愚かな者がいるでしょうか？この聖句では、主の御心が明確に示されています。モーセへの召命は、かたくなな民と離れ、より大きな国を導

く者となることです。モーセは当然、その召命と神の啓示を謙虚に受けると、わたしたちは思うでしょう。ところが、次に起こったのは、全く正反対のことなのです。モーセは召命を受け入れないばかりか、主に躊躇することなく、民の命を助け、彼らを赦してくださるようにと異議を申し出るのです。モーセは主の憐れみを懇願します。モーセは民が病気に苦しみ、傷つき、死に直面しているのを知っているのです。モーセは、心の底から彼らの命を懇願します。「新しい国を作るのをおやめください。すでにお作りになった国をいやし、お赦してください」と、モーセは、主にそう語りかけているかのようです。それだけではなく、モーセは民の命を救いたい一心で、彼らの命とモーセ自身の命を引き換えにするとさえ言います（32節）。モーセは、かたくなな民が減びていくのを見るくらいなら、死んで地獄の苦しみを味わったほうが良いと言うのです。この神に反抗的な国は、主の御名を称えている国なのです、それだけで救済に値する価値が彼らにはあるのです。

わたしたちも、このモーセの心を持たなければなりません。わたしたち、そして、教会に与えられた神の啓示や召命が何であろうとも、愛はそれよりも無限に偉大なのです。「新しい教会ではなく、主よ、どうか今すでにある教会をいやしてください。新しくより優れた先導者ではなく、イエス様にあるわたしたちへの主の御心が叶うように、主よ、どうか、今すでにいる先導者を生き返らせてください。ああ神よ、いやしてください。わたしは今、苦しみに満ちています！」

教会に必要なのは、イエス・キリストにある愛です。愛がわた

したちを一つとするのです。ヨハネによる福音書第 17 章 20 節から 26 節と、ヨハネによる福音書 13 章 34 節から 35 節を照らし合わせて見てみましょう。そこでイエス様の語られる、一体という意味が明らかになります。それは、わたしたちの互いへの愛から自然と生まれ出るものであるということです。イエス様の愛を受けるとき、わたしたちも自然と互いに愛し合うようになるのです。イエス様の教会への働きとは、すなわち、頭から足の先までが完全に愛で高められた体を作り上げることです。これがイエス様が教会でなされる御業なのです。イエス様が頭となって、わたしたちの中で働いてくださいます。そしてそれは、わたしたちが互いに、完全な調和と平和のもとに一緒に働けるためなのです（エペソ人への手紙第 4 章 15 節から 16 節）。

言うまでもありませんが、この教会全体が一体となるには、個々の教会からはじまります。もし、その教会が愛で結ばれていなければ、ほかの教会にこの愛を伝えることはできません。大きな業をなす前に、まず小さなことをなすべきなのです。わたしたちが小さな働きに信頼を置けないものであれば、イエス様は大きな働きを与えてくださりません。ですから、愛は、わたしたちの小さな教会からはじまり、体全体と広がっていかなければならないのです。つまり、個々の教会の完全な愛の結びによってのみ、この教会全体の一体化についても考えられるようになるのです。わたしたち、信じる者が互いに愛し合うとき、その愛が自然とほかの教会へ、この世へと溢れ出ていくのです。

ここで、次へと進みたいと思います。わたしたち教会が一つに

なるとき、イエス・キリストの福音を世界に伝えたいと望むようにならなくてはなりません。この約束は、ヨハネによる福音書第13章34章から35章、第13章21節から23節にて語られています。ここで語られる内容が神に喜ばれる伝道です。ヨハネによる福音書第13章、第17章にある聖句をもう一度見て、おなじみの聖句、マタイによる福音書第28章18節から20節と比べてみましょう。

「34 わたしは新しいおきてをあなた方に与える。わたしがあなた方を愛したように、あなた方が互いを愛することだ。あなた方も互いに愛し合うためだ。あなた方が互いに対して愛を抱けば、35 これによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子だということを知るだろう。」(ヨハネによる福音書第13章34節から35節)

「21 彼らがみな一つになるためです。ちょうど、父よ、あなたがわたしたちのうちにおられ、わたしがわたしがあなたのうちにいるのと同じようにです。それは、彼らもわたしたちのうちで一つになるためであり、あなたがわたしを遣わされたことを世が信じるためです。22 あなたがわたしに与えてくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23 わたしは彼らのうちにおり、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためであり、また、あなたがわたしを遣わされ、あなたがわたしを愛されたとおりに彼らを愛されたことを、世が知るためでもあります。」(ヨハネによる福音書第17章21節から23節)

「18 イエスは近寄って来て、彼らに話して言った、『わたしには天と地のあらゆる権威が与えられた。19 だから、行って、あらゆる民族の人々を弟子とし、父と子と聖霊の名において彼らにバプテズマを施し、20 わたしがあなた方に命じたすべての事柄を守るように教えなさい。見よ、わたしは、この時代の終わりまで、いつもあなた方と共にいるのだ』。アーメン。」(マタイによる福音書第28章18節から20節)

この3つの聖句を注意深く読むと、イエス・キリストの伝道と宣教に対する御心がはっきりと見えてきます。マタイによる福音書第28章18節から20節は、通常、大宣教命令として、引用されます。わたしたちの任務、それは世界に福音を述べ伝え、弟子をつくることです(ルカによる福音書第24章47節、マルコによる福音書第16章15節もご参照ください)。しかし、世界に福音を述べ伝え、弟子をつくるというのは、いったいどのような意味でしょうか？マタイによる福音書第28章18節から20節を注意して読むと、そこで答えを見ることができます。イエス様は弟子に、彼が命じたすべての事柄を守るよう世界に教えなさいと語られたのです。では、イエス・キリストの命じた事柄とは何でしょう？それは、イエス様を信じ、互いに愛し合うことです。イエス様を信じることによって、わたしたちは救われ、そして、信じることによって、ほかのすべて、すなわち、洗礼、神聖、祈り、よき業、伝道がついてくるのです。しかし、すでに触れたとおり、イエス・キリストへの信仰の生み出

す最も素晴らしい働きは、愛です。イエス様のわたしたちへの愛を信じることで、わたしたちも自然に、溢れるほどの愛の実を結ぶことができるのです。使徒たちの手紙に、信仰と愛が何よりも頻りに語られているのは、そのためでなのです。もう一度、パウロの手紙から、ユダの手紙までじっくり注意して読んでみてください。伝道に関わり、人を救いへ導くことより、愛によって働くイエス様への信仰が、百倍も強調されています。それはどうしてでしょうか？それは、イエス様がそのように全世界へと教えるようにと、使徒たちが理解したからではないでしょうか。使徒たちは、愛によって働くイエス様への信仰を示し、教えたのです。彼らがわたしたちに望んでいたことは、わたしたちが、お互いに愛し合い、お互いに忠実で誠実であることなのです。お互いに忠実であれば、神もわたしたちや教会に忠実でいてくださいます。しかし、わたしたちが愛と信仰にもとづいて一つにならないとすれば、父が御子をこの世に送ってくださったことを、だれが信じてくれるでしょうか？ですから、イエス・キリストの体として、お互いに忠実でありましょう。わたしたちが、お互いに忠実であれば、神もわたしたち、そして教会に忠実でいてくださいます。そして、そこから、たくさんの人々が救われることになるのです（使徒行伝第2章44節から47節）。

もう一度言います。わたしたちがイエス様にあって一つになることにより、父がイエス様を世界の救い主として世に送ってくださったことが、世界の知るところとなります。わたしたちは、これ信じなければなりません。これは、とても簡潔なメッセージなのです。ですから、愛によって一つになりましょう。教会に人を集める

ための、より良い方法や戦略など必要ありません。人を引き寄せるために、福音を魅力的、友好的にする方法を考える必要もありません。イエス様が真に世界の救い主だと信じて、イエス様が世に忠実だと、ただ信じましょう。イエス様が、わたしたちの中で、そして、世界中でその御心をなされるように望みましょう。愛によって一つになりましょう。そして、そこで世界中に神の善が伝わる様を、見守るのです。

イエス・キリストの教会として最後に望むことは、イエス様がおられるところにわたしたちも共にいて、神から生まれた御子イエス様の栄光を見ることです。イエス様がヨハネによる福音書第17章24節の中で言われました。「父よ、わたしに与えてくださった者たちも、わたしのいる所に共にいて欲しいと思います。あなたがわたしに与えてくださったわたしの栄光を見るためです。世の基礎が置かれる前から、あなたがわたしを愛してくださったからです。」イエス様は、わたしたちが共にいて、その栄光を見るのが望みだと、父に言われていることは明らかです。ああ、なんとすばらしいことでしょう。わたしたちが心から愛するお方が、わたしたちを求めておられるなんて！わたしたちの愛が報われるなんて、なんて素敵なことでしょう！パウロと共に「わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい」(ピリピ人への手紙第1章23節)と宣言したくなります！頭と共にいる、これが、イエス・キリストの体の希望なのです！頭のない体を想像できないのと同じように、イエス・キリストのない教会を想像することはできないのです。世の始まりから、わたした

ちの運命は、イエス様のおられるところに共にいて、彼の栄光を見ることなのです！

ヨハネによる福音書から引用した部分は、天の御国のことを示しています。天の御国は、イエス・キリストの栄光に満たされた場所です。そこはイエス・キリストのすべてなのです。イエス様がおられる場所であり、そして、天の御国は主の内にあります。天の御国は、イエス様に満たされているということから、天の御国がイエス・キリストそのものだと言っても過言ではありません。天の御国は、わたしたちが、目の前でイエス様の栄光を見ることが出来る場所なのです。このことを理解すると、イエス様が戻って来られ、わたしたちを集められ、イエス様のおられるところに集まる日を心待ちにすることは自然なことです。そして、また、わたしたちのこの世での最善の思考、目標は常にイエス・キリストであって、イエス・キリストのみでなければなりません。それは、イエス様が、わたしたちの過去、現在、そして未来だからです。さらに、わたしたちの永遠の存在が、イエス様の御名のもとにあるからです。また、わたしたちは、「天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている…わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。」(コリント人への第二の手紙第5章2節から8節)と思うようになるのです。

イエス様がこれからなされることを考えると、イエス様を求める気持ちはさらに、より大きくなります。わたしたち、つまり、教会は、心がもたえるかのように「イエス主よ、きたりませ。」(ヨハ

ネの黙示録第 22 章 20 節) と祈りで一体となり、イエス様の再臨を熱心に心待ちにしているべきなのです。イエス様の再臨を望み、わたしたちが一体となることは、欠くことのできない最も重要なことでしょう。頭のない体が不完全であるのと同じで、手や足がない体もまた、不完全なのです(わたしたちは体の一部分ですから、わたしたちの望みが一つになっていなければなりません。コリント人への第一の手紙第 12 章 3 節から 27 節)。わたしたちは一つになり、わたしたちの頭を待つ必要があります。イエス・キリストが来られるとき体は完全なものとなり、わたしたちは、永遠の愛と栄光のもと一つとなるのです。わたしたちは「神の日の到来を熱心に待ち望んでいる」べきなのです(ペテロの第二の手紙第 3 節 12 章)。

イエス様の再臨は、不信心な世界にとっては非常に恐ろしいものです。しかし、わたしたちのように救われた者にとっては、すばらしいことです。そして、イエス様の再臨によって、すべてが完全なものになるでしょう。わたしたちは、幼子のような信仰で、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」(ヨハネによる福音書第 6 節 47 章) という約束信じているのですから、主の再臨に自信を持ちましょう。イエス様の忠実以外に頼るものがありません。イエス様は、わたしたちを救うと約束してくださり、その約束を十字架の血によって証印されました。イエス様は生き返られ、わたしたちもまた、慰めの日を心待ちに待ちましょう。わたしたちの心も生き返るのです。イエス様が生きておられるから、わたしたちも生き、また生きなければなりません。わたしたちの神イエスと、その父と共に家族として永遠に生きるの

です。この世がこれらのことを受け入れられないことを、わたしたちは知っています。この世はこのようなことを愚かだと思っています。ましてや、不信心な世界では恐ろしいことなのです。しかし、主の聖霊によって証印をおされたわたしたちには、「しかり、アアメン」（ヨハネの黙示録第1章7節）と言える自信があるのです。

神の目的は、すべての聖人がイエス様のもとに集まることによって達成されます。その日が来ることを何よりも強く、皆で望みましょう。どんな理由であれ、言い訳を言うのは止めましょう。イエス様の再臨を妨げるような考えはすべて捨てましょう。イエス・キリストは主を待つ人を望まれています。イエス様は、主と共にいたいと切望する人を望まれています。イエス様は、だれよりもイエス様を、何よりもイエス様を優先する人を望まれています。イエス様は、そのように主を待ち望んでいる人、イエス様の再臨を心待ちにしている人のもとにやって来られるのです（ヘブライ人への手紙第9章28節、テモテへの第二の手紙第4章8節）。

世界の創造されたもの、創造されていないものすべてが切なる思いでイエス様の再臨を待ち望んでいることなのです。そして、教会としてイエス様の再臨を待ち望んでいることはもっとも当たり前ことでしょう。（ローマ人への手紙第8章19節から25節、ヨハネによる福音書第17章24節）。イエス様がこうおっしゃっています。「しかり、わたしはすぐに来る」（ヨハネの黙示録第22章20節）。二千年近くにわたって、イエス様は、わたしたちの天の家、そして、体を完璧なものにする準備をされておられます（ヨハネによる福音書第14章3節、エペソ人への手紙第5章25節から27節）。イエス

様は、この長い間、ずっと準備されているのです。わたしたちも主のお手伝いを共にしましょう。御言葉を実らせましょう。そして、信仰と愛によって一つとなり、イエス様の再臨を早めようではありませんか。

最後に、もう一度だけ言いたいですが、わたしたちの未来は明るく、輝かしいものです。勇敢になりましょう。イエス様は、世界の救い主で、イエス様を信じるすべての人を救う忠実なお方です。イエス様は、わたしたちを見ておられ、わたしたちと共にいたいと望んでおられます。イエス様は、わたしたちの中に、疲れきり、弱くなった人々が数多くいることを知っておられます。わたしたちの多くが最も小さい兄弟の一人だということもご存知です。イエス様は、愛しておられる人々をお忘れではありません。わたしたちに向けられたイエス様の思いは良いもので、わたしたちの謙遜の心が、未来の栄光をよりいっそう喜ばしいものにさせるのです。ですから、勇気を持って、次の息を求めることよりもイエス様を求めましょう。小さな子供のように、イエス様の御前に行き、イエス様と共にいましょう。完全なる敬愛の念を持って、イエス様の御前にとどまりましょう。イエス様は、わたしたちの神であり、わたしたちの救い主であります。御子を送ってくださった父なる神を讃え、信仰と無罪のもと、御子の前にひざまずきましょう。主は、わたしたちのことを知っておられます。わたしたちには主に献げるものなど何も無いこともご存知です。「わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方に安らぎを与えよう。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」(マタイによる福音書第11章28節、ヨハネに

よる福音書第6章47節)

イエス・キリストにある方々が、この本によって元気づけられることを願っています。神が皆さんと共におられ、わたしたちの目と心がいつも主に注がれますように。わたしたちのお互いの愛が、すばらしい噴水のように溢れ出しますように。わたしたちが、イエス様の内に一つとなりますように。ハレルヤ！来たりませ、主イエスよ、早く来たりませ！アーメン。

